井尻B遺跡 7

－井尻B遺跡群第11次調査の報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第644集

2000

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第644集　井尻B遺跡7正誤表

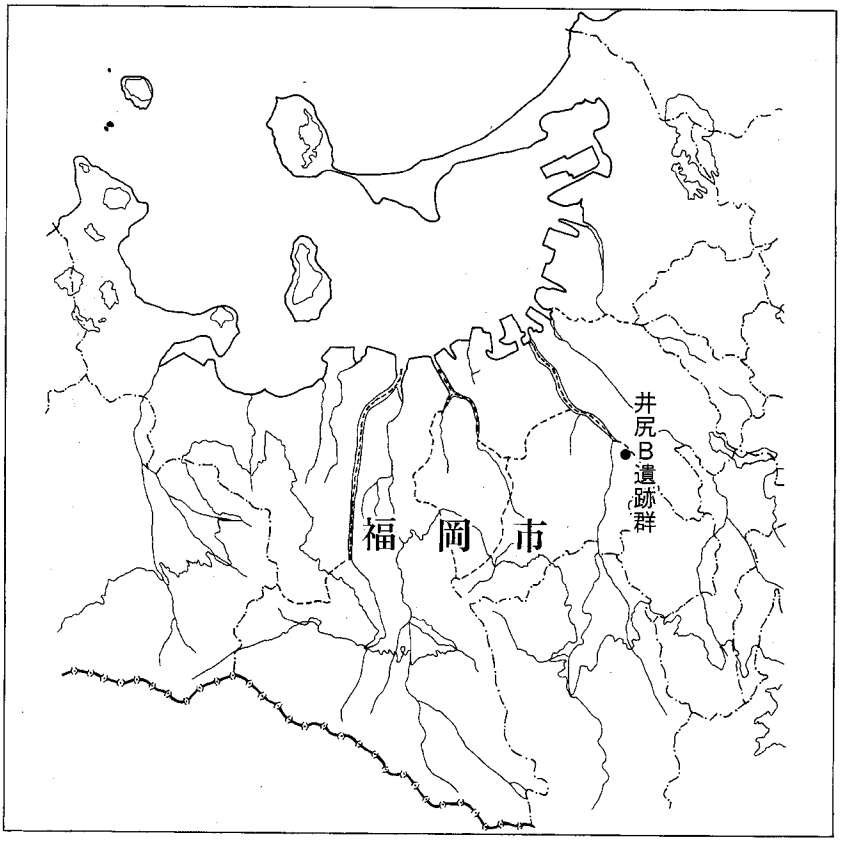
頁	行	誤	正
15	3	8・9は広口壺の口縁。	8・10は広口壺の口縁。
15	4	9は素口縁で…	10は素口縁で…

いじり

井尻B遺跡　7

－井尻B遺跡群第11次調査の報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第644集



調査番号　9809

遺跡略号　IZB-11

2000

福岡市教育委員会

序

古くから大陸文化を受け入れる窓口として栄えてきた福岡市には、数多くの文化財が存在しています。福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録による保存に努めているところです。

本書で報告いたします井尻Ｂ遺跡群は旧石器時代から人々が生活していたことがわかっています。弥生時代においては「奴国」の王墓や青銅器・ガラスの工房がある須玖遺跡群と、拠点集落である那珂・比恵遺跡群の中間に位置する集落として重要な位置を占めています。また、奈良時代には多くの瓦の出土から寺院の存在が予想されています。

今回の調査では弥生時代のたくさんの土器とともに銅矛の鋳型、銅鏃、鐸形土製品といった貴重な文化財が発見されました。

本書が市民の皆様の埋蔵文化財に対するご理解を深める一助となりますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただきました都市基盤整備公団アーベイン井尻担当関係者をはじめとする関係各位の皆様には、心より感謝申し上げます。

平成12年３月31日

福岡市教育委員会
教育長　　西　憲一郎

例　言

1．本書は、福岡市南区井尻１丁目13番地の団地建替に伴い、福岡市教育委員会が1998（平成10）年４月23日から６月30日にかけて発掘調査を実施した井尻（いじり）Ｂ遺跡群第11次調査の報告書である。

2．遺構の呼称は記号化し、建物→ＳＢ、溝→ＳＤ、井戸→ＳＥ、土壙→ＳＫ、ピット→ＳＰとした。遺構番号はピットを除いて連番とした。ピットは別に番号を付けた。

3．本書に使用した遺構実測図は春田城二、藤野雅基、田上勇一郎が作成した。遺物実測図は鋳型については後藤直氏によるものである。そのほかは土器については久住猛雄、武下里織、西山めぐみ、西堂将夫、宮里修が、石器・土製品については坂元雄紀、田上が、旧石器については吉留秀敏が作成した。また、製図には吉留、武下里織、西山めぐみ、藤野雅基、坂元雄紀、丸井節子、田上があたった。

4．本書に使用した写真は田上が撮影した。

5．本書に使用した標高は海抜高である。

6．本書に使用した方位は磁北である。本地域では真北に対し６°18′西偏する。

7．本書の執筆は旧石器に関して吉留秀敏が、それ以外の執筆と編集を田上が行った。

8．本調査にかかわるすべての遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・公開される予定である。

目　次

Ⅰ　はじめに …… 1
　1．調査にいたる経緯 …… 1
　2．調査の組織 …… 1
　3．調査地点の立地と環境 …… 2
Ⅱ　調査の記録 …… 6
　1．調査の経過と概要 …… 6
　2．第１面の調査 …… 8
　3．第２面の調査 …… 12
　4．包含層の調査 …… 33
Ⅲ　まとめ …… 44

調査番号	９８０９			遺跡略号	ＩＺＢ－１１
調査地地籍	南区井尻１丁目１３番地			布地図番号	井尻　２５
開発面積	13,144㎡	調査対象面積	1,000㎡	調査面積	690㎡
調査期間	1998年（平成10年）４月23日～６月30日				

Ⅰ　はじめに

1．調査にいたる経緯

1997（平成９）年10月31日付文書で住宅・都市整備公団九州支社支社長本吉達氏より福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、福岡市南区井尻１丁目13番地内の井尻団地建替事業に関しての埋蔵文化財事前審査願が提出された。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である井尻Ｂ遺跡内に位置するため、埋蔵文化財課では12月17日に試掘調査を実施した。その結果、井戸、柱穴などが検出され、弥生土器、須恵器、瓦などが出土した。これをふまえ、申請者と団地建替によって破壊される遺跡の取り扱いについて協議を重ね、建築工事で破壊される部分を対象に本調査を実施することで合意に達した。本調査は住宅・都市整備公団九州支社の受託調査として４月21日より６月30日まで実施した。また、整理作業と報告書の刊行は1999（平成11）年度に行った。

2．調査の組織

発掘の調査・整理を行うにあたっての組織は以下の通りである。

調査委託　住宅・都市整備公団（現　都市基盤整備公団）九州支社
　　支社長　本吉達

調査主体　福岡市教育委員会　教育長　町田英俊（調査年度）
　　西憲一郎（整理年度）

調査総括　埋蔵文化財課　課長　柳田純孝（調査年度）
　　山崎純男（整理年度）
　　調査第２係長　山口譲治（調査年度）
　　力武卓治（整理年度）

調査庶務　文化財整備課　河野淳美

調査担当　埋蔵文化財課事前審査係　杉山富雄　中村啓太郎（試掘調査）
　　調査第２係　田上勇一郎（本調査）

調査補助　春田城二　藤野雅基

調査作業　安藤峰正　伊藤健太　岩崎良隆　上野龍夫　江嶋光子　岡部静江　小川秀雄　小野千佳　甲斐康完　亀井薫　河野一一　黒瀬千鶴　古賀義博　酒井次憲　坂口剛毅　真田弘二　篠崎伝三郎　世利陽子　芹野謙蔵　大長正弘　高崎秀巳　高野瑛子　武田潤子　谷英二　堤正子　徳永静雄　豊丸秀仁　布江孝子　廣田安平　別府俊美　松井一美　森本勇夫　山下智子　吉住政光　吉田博昭

整理補助　武下里織　西山めぐみ

整理作業　木村良子　丸井節子　山本良子　尾崎君枝　加集和子　西堂将夫　坂元雄紀　宮里修

また、調査時の条件整備等に関して、住宅・都市整備公団九州支社をはじめとして、株式会社守谷組、アーベイン井尻の住民の方々に多大なご協力を賜った。また、資料整理において、東京大学の後藤直先生には出土した鋳型についてご教示いただき、実測していただいた。報告書作成には吉留秀敏、久住猛雄（福岡市教育委員会文化財部）の協力を得た。記して感謝の意を表したい。

3．調査地点の立地と環境

井尻Ｂ遺跡群は福岡平野のほぼ中央部に位置し、平野を北西方向に流れる御笠川と那珂川に挟まれた標高11～15mの阿蘇山を起源とするAso-4火砕流によって形成された火砕流台地上、南北1,000m、東西300mの範囲に分布する。この火砕流台地は春日丘陵から北方に井尻、五十川、麦野、板付、諸岡、那珂、比恵と断続的に分布しており、それぞれに遺跡分布がみられる。火砕流の堆積物は上部の暗赤褐色土を鳥栖ローム、下部の白色粘土を八女粘土と呼んでいる。この違いは地下水位の影響であると考えられている。火砕流の噴出年代は７～９万年前とされている。

井尻Ｂ遺跡群ではこれまで15次にわたる調査が行われている。遺跡北部の東側では１、３、４、８、11、14次の調査が行われている。うち、１、８、11、14次は台地の落ち際に位置し、遺跡の縁辺といったところである。北部西側では７、10、15次の調査地点がある。いずれも小面積の調査である。13次調査は北部唯一の台地中央部の調査であるが調査面積は非常に狭い。遺跡南部では西鉄井尻駅から南150m付近で２、５、６、12次とまとまって調査されている。９次調査地点は南部の西側唯一の調査地点である。まだ調査地点・調査面積が少なく、特に台地の中央部ではほとんど調査が行われていない。全貌はつかみ得ないが、時代をおって井尻Ｂ遺跡群の概要を説明する。

これまでの調査で時期的にもっとも遡るのは２次調査で出土した古銅輝石安山岩製のナイフ形石器と黒曜石製の台形石器である。Tool２点のみの出土であり、搬入品と考えられている。

同じ２次調査では２ヶ所の細石刃文化期の遺物集中部がみられ、Ⅰ群では細石刃13点、細石刃核２点、敲石１点、削片29点、Ⅱ群では細石刃11点、細石刃核１点、削器５点、彫器１点、剥片12点、削片72点、石核２点が出土している。福岡平野では貴重な旧石器時代の調査例である。

縄文時代から弥生時代前期までの遺構はこれまで見つかっておらず、つぎに生活痕跡が認められるのは弥生時代中期になってからである。

３次調査では竪穴住居１軒と中期中頃の井戸１基、４次調査では中期後半の土坑２基、６次調査では中期末の井戸１基を検出した。

８次調査と今回報告する11次調査では中期の土器が主体となる包含層が調査されている。

10次調査では中期中頃から後半と考えられる幅２m、深さ1.5mの大規模な溝が検出されている。溝には陸橋部があり、門柱らしきピットが確認されている。

次の弥生時代後期に比べ、分布は散漫で、遺構密度は低い。ただし、８、11次調査で多量の中期土器が出土しており、該期の集落が周辺に広がっていることを予想させる。

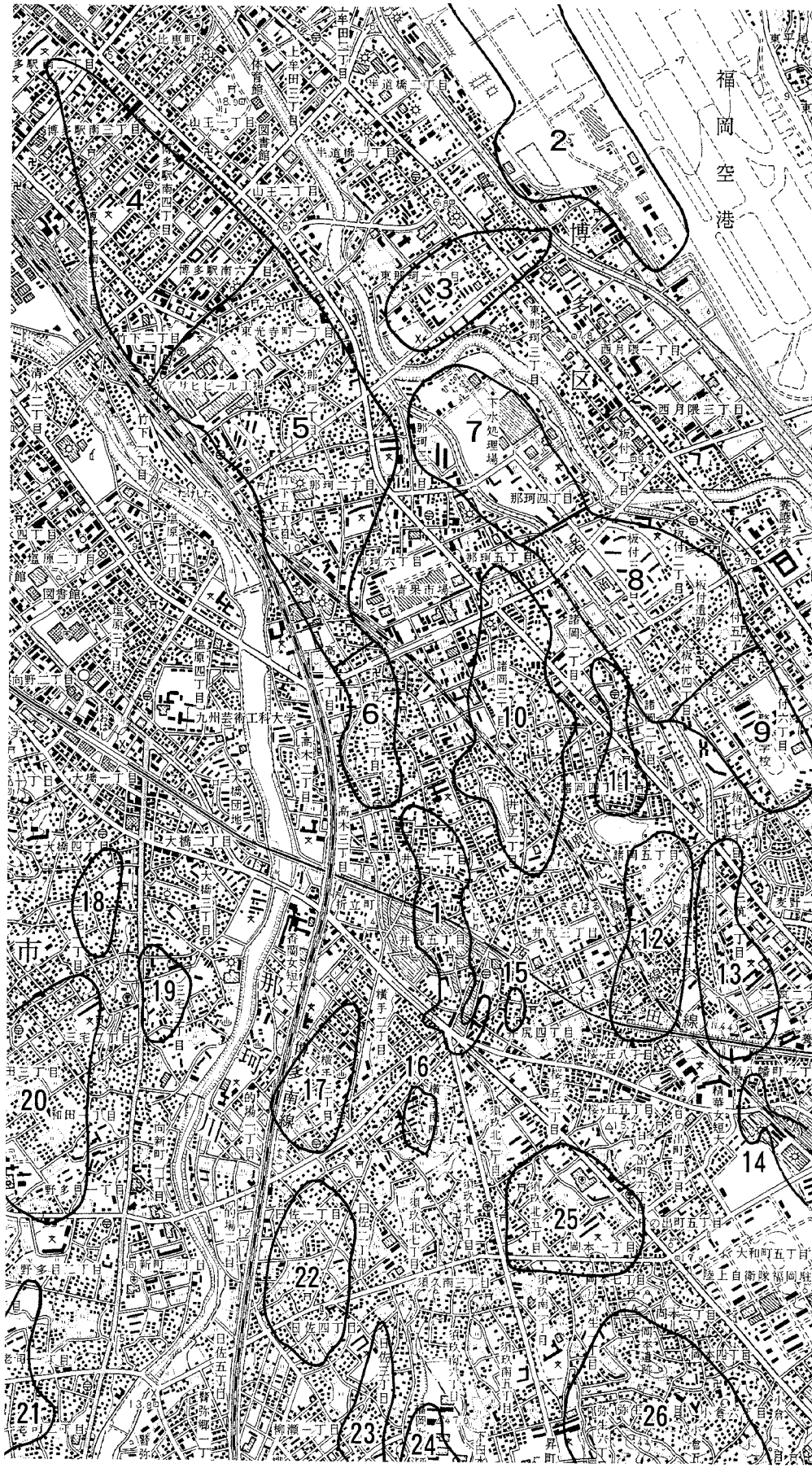
弥生時代後期から古墳時代前半にかけての時期が井尻Ｂ遺跡群の最盛期であり、ほとんどの調査地点でこの時期の遺構がみられる。竪穴住居は２次調査で５軒、３次調査で17軒、４次調査で12軒以上、６次調査で17軒、９次調査で１軒、12次調査で３軒などと、台地上至るところに集落が広がっていたと考えられる。

また、２次調査では土壙墓14基や石蓋土壙墓２基が集落と区画されて検出されている。

６次調査では後期の土壙より鏡、鏃の鋳型が出土しており、青銅器生産が行われた可能性が指摘されている。

２・５次調査では古墳の周溝が検出され、その中から初期須恵器の大甕、高坏、円筒埴輪や朝顔形埴輪、家形埴輪、鉄刀、鉄剣、刀子、ガラス製小玉が出土しており、５世紀後半の円墳もしくは前方後円墳と考えられ、井尻Ｂ１号墳と名付けられた。

古代の集落も営まれており、２、３次調査では竪穴住居が、６、10次調査では掘立柱建物が検出さ



1　井尻Ｂ遺跡
2　雀居遺跡
3　東那珂遺跡
4　比恵遺跡
5　那珂遺跡
6　五十川遺跡
7　那珂君休遺跡
8　板付遺跡
9　高畑遺跡
10　諸岡Ａ遺跡
11　諸岡Ｂ遺跡
12　笹原遺跡
13　三筑遺跡
14　南八幡遺跡
15　井尻Ａ遺跡
16　寺島遺跡
17　横手遺跡
18　大橋Ｅ遺跡
19　三宅Ｃ遺跡
20　三宅Ｂ遺跡
21　野多目Ｃ遺跡
22　日佐遺跡
23　弥永原遺跡
24　日佐原遺跡
25　須玖遺跡群
26　岡本遺跡群

Fig. 1　井尻Ｂ遺跡群の位置（1/25,000）

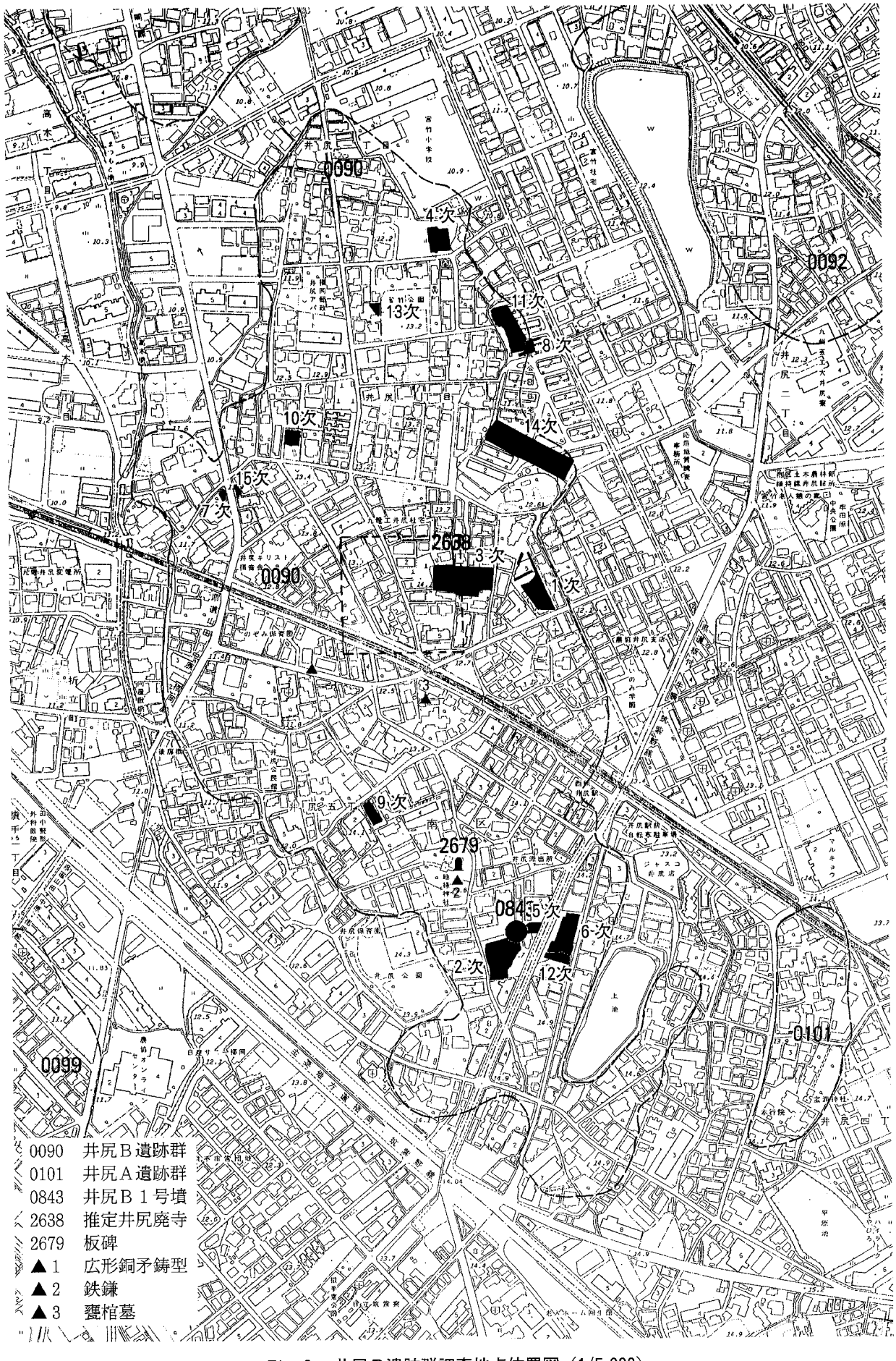


Fig. 2　井尻Ｂ遺跡群調査地点位置図（1/5,000）

れている。

また、3次調査では南北方向の溝から百済系単弁瓦をはじめとする7世紀後半から8世紀前半の多量の瓦が出土し、寺院の存在が想定されている。

その後、古代末、中世の遺構はこれまでのところ検出されていない。

次に井尻B遺跡群の最盛期である弥生時代の周辺の遺跡について簡単に説明する。福岡平野は魏志倭人伝に記された「奴国」に比定されており、井尻B遺跡群もその中に含まれる。

奴国の王墓である須玖岡本遺跡は南方2kmに、青銅器工房である須玖永田遺跡、須玖坂本遺跡、黒田遺跡やガラス工房である須玖五反田遺跡は南方1kmに位置する。

北方には奴国の拠点集落である那珂・比恵遺跡群が広がる。これまであわせて140次を越える調査が行われている。縄文時代晩期・弥生時代早期から環濠集落が営まれはじめ、弥生時代中期後半に100ヘクタールを越える那珂・比恵遺跡全体に集落が展開する。青銅器の鋳型や取瓶など鋳造関係の遺物も出土している。弥生時代終末には並列する2条の溝が遺跡の西縁を南北に貫いており、道路の側溝である可能性が指摘されている。

井尻B遺跡群は弥生時代において、奴国の王墓があり、青銅器・ガラス工房などがある須玖の遺跡群と拠点集落である那珂・比恵遺跡群の中間にあり、台地全体に広がりそうな集落と区画された墓地群があり、青銅器生産を行う、奴国の一つの拠点集落であるといえよう。

参考文献

春日市教育委員会編　1994　『奴国の首都　須玖岡本遺跡』　吉川弘文館

下山正一　1998　「福岡平野の縄文海進と第四紀層」『福岡平野の古環境と遺跡立地』　九州大学出版会

久住猛雄　1999　「弥生時代終末期「道路」の検出」『九州考古学』第74号

その他福岡市埋蔵文化財調査報告書を参考にした。

Tab. 1　井尻B遺跡群調査一覧

調査次数	調査年	所　在　地	調査原因	文　　献
第1次調査	1981年	井尻1丁目111－1外	共同住宅建設	市報111集（1984）
第2次調査	1986年	井尻5丁目175－1	共同住宅建設	市報175集（1988）
第3次調査	1992年	井尻1丁目293－1、2外	共同住宅建設	市報411集（1995）
第4次調査	1993年	井尻1丁目747－1	共同住宅建設	市報412集（1995）
第5次調査	1994年	井尻5丁目171－3	病院建設	市報441集（1996）
第6次調査	1995年	井尻4丁目170、171－1	共同住宅建設	市報529集（1997）
第7次調査	1995年	井尻1丁目363－2外	個人住宅建築	市年報Vol.10（1997）
第8次調査	1997年	井尻1丁目13番地内	団地建て替え	市報571集（1998）
第9次調査	1997年	井尻5丁目6－33	共同住宅建設	未報告
第10次調査	1997年	井尻1丁目27－13	個人住宅建築	未報告
第11次調査	**1998年**	**井尻1丁目13番地内**	**団地建て替え**	**本書**
第12次調査	1999年	井尻4丁目170－1外	共同住宅建設	市報645集（2000）
第13次調査	1999年	井尻1丁目755－8	個人住宅建築	整理中
第14次調査	1999年	井尻1丁目13番地内	道路建設	整理中
第15次調査	2000年	井尻1丁目362－3	共同住宅建設	整理中

Ⅱ　調　査　の　記　録

1．調査の経過と概要

井尻団地の建て替え事業については1991（平成３）年度に事業地全体の13,144㎡について事前審査願いが提出されており、事業の進捗にあわせて試掘調査、本調査を行うことになっている。1997（平成９）年２月には第１工区を対象にして本調査が行われた（井尻Ｂ遺跡群第８次調査）。今回は第１工区北側の第２工区を対象とした本調査である。

調査は1998（平成10）年４月23日より開始した。まず、北西部から重機により表土除去に取りかかった。現地表から80～90cm下げるとローム層になり、遺構検出面とした。調査地点は台地の落ち際で、試掘調査によりロームの面が東に行くに従い、下がっていき、その上部に包含層が形成されていることがわかっていた。また、台地の落ち際から離れると包含層の遺物の出土量が極端に減ることが８次

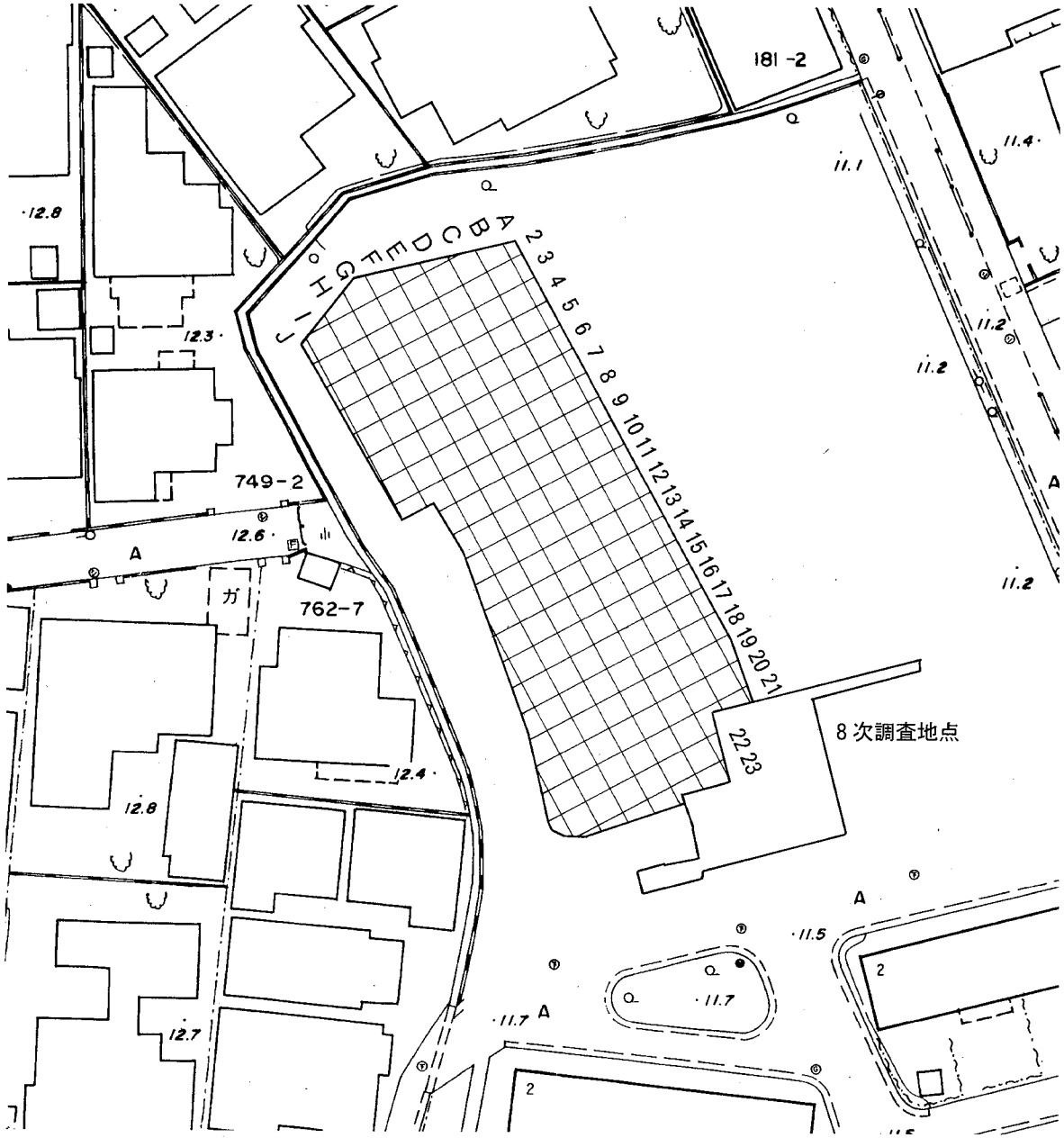


Fig. 3　調査区域図（1/500）

調査の結果からわかっていたので、開発地区の西側半分を調査対象とした。

発掘区北壁の東側の土層図をFig. 4 に示す。1～4 層は井尻団地建設の際の盛り土である。1 層は小礫のバラス、2 層は真砂土、3 層は黒色の砂礫層、4 層は緑がかった砂の層である。

5 層は旧耕作土で、灰暗褐色土層である。東側では暗渠が切り込んでいる。6 層は茶褐色土である。

7 層が上層の包含層で、暗茶褐色土層である。

8～10層が下層の包含層である。8 層は灰色味がかった黒色土、9 層は黒色土、10層は黒色土に灰白色粘土が混じる層である。

11層は灰色砂に黒色土や灰色粘土が混じる層であり、若干の土器片を含んでいたので、最下層の包含層として遺物を取り上げたが、量は非常に少ない。

12～14層は地山で、深さは確認していない。12層は黄褐色のローム、13層は黄白色の粘土層、14層は灰褐色の粗砂層である。

包含層を手掘りで下げた後、遺構検出を行う予定であったが、西側のローム面で検出した溝が、東側では包含層上面に伸びていたので、この面で 1 回目の遺構調査を行うことにした。涌水があるので、調査区壁際には排水溝を設けた。4 月30日まで表土除去を行った。調査面積は690㎡となった。

5 月 1 日より攪乱除去から作業開始。基準杭を設置し、調査区の形に合わせた任意の方向で 2 × 2 m方眼のグリッドを組んだ。名称は東から西へA・B・C…　J、北から南へ 1 ・ 2 ・ 3 …23とし、その交わったところを地区名とした。各遺構の説明における所在地はこのグリッドの地区名による。

18日、第 1 面の遺構確認を行い、掘削を開始した。翌19日には完掘し、全体写真撮影を行った。

21日より包含層の掘削を開始した。包含層は暗茶褐色の層と黒褐色の層の 2 層あり、まず上層より掘り下げ、グリッドごとに遺物を取り上げた。しかし場所によってはこの 2 層が明瞭に分離できない部分もあった。6 月 1 日より包含層下層の掘削を開始する。多いところでは 1 グリッドにつきコンテナケース 2 箱の出土遺物があった。

3 日より包含層掘り下げと並行して第 2 面の遺構掘削を開始した。4 日、包含層より銅鏃、ＳＥ０７より弥生土器の完形壺出土した。10日には包含層を下げ終わった。18日、第 2 面の全体写真の撮影を行う。その後、実測図作成を行った。

26日から30日まで重機により埋め戻しを行い現地での調査を終了した。

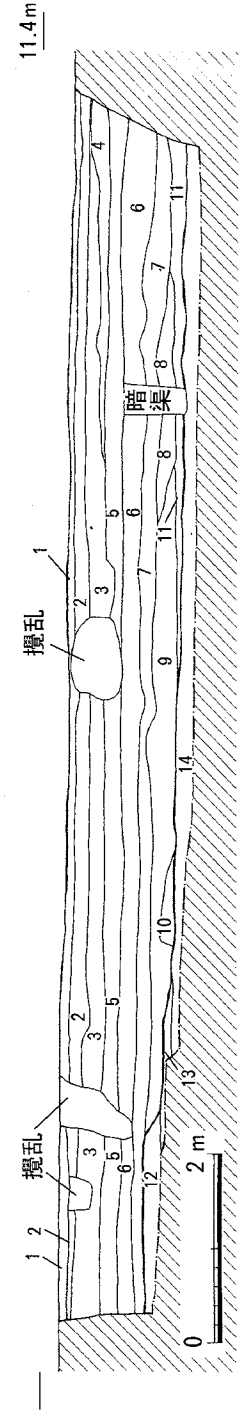


Fig. 4　調査区北壁東側土層図（1/80）

2．第１面の調査

調査区西側より、ローム層を覆う茶褐色の土層を東に向かって除去していくと、中央あたりでローム層が現れなくなり、暗茶褐色の土器を多量に包含する層が現れる。この層を切って灰暗茶褐色の溝状遺構が検出されたので、この面を第１面として調査をおこなった。標高は調査区西端で10.5m、東端で10.3mであり、緩やかに東側に傾斜する。調査区南西端は攪乱が多かった。また、近年の暗渠が調査区を縦横断しており、これを掘り上げた。

第１面では溝３条、土坑２基を調査した。溝３条と土坑ＳＫ０４は一連のものと考えられるが、時期を確定できる出土遺物がなく、不明である。古代から中世と考えている。

（1）溝

ＳＤ０１

Ｉ－１～６、Ｊ－５・６に位置する南北方向の溝である。ローム層を切り込んでいる。ＳＢ０６、ＳＫ１２を切る。長さ10.5m分調査した。北側は調査区外へ伸びる。残存する幅は0.5m、深さは20cmである。南側はＳＫ０４に接続し、東へ折れ、ＳＤ０２へと続く。覆土は灰暗茶褐色粘質土で黄褐色土ブロックを含む。出土遺物は弥生土器片が多いが須恵器片が混ざる。

ＳＤ０２

Ｂ～Ｉ－７、Ｄ～Ｇ－８に位置する東西方向の溝で、西側はローム層を切り込み、東側では暗茶褐

Ph. 1　第１面調査区全景（南から）

Fig. 5　第１面遺構分布図（1/200）

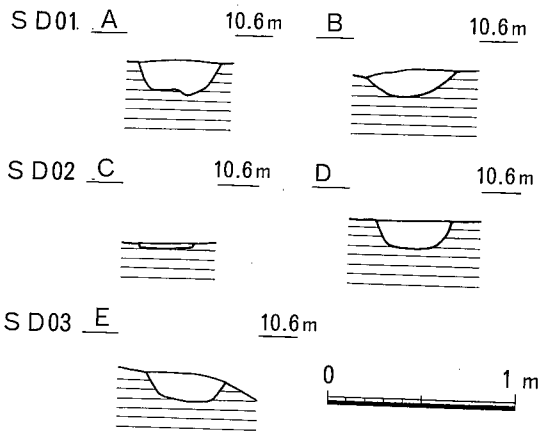
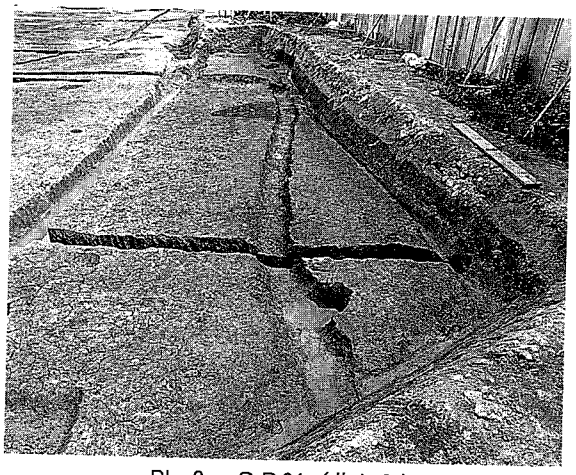
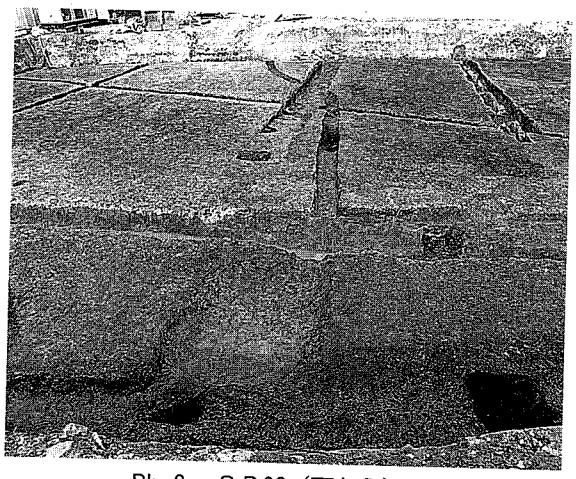


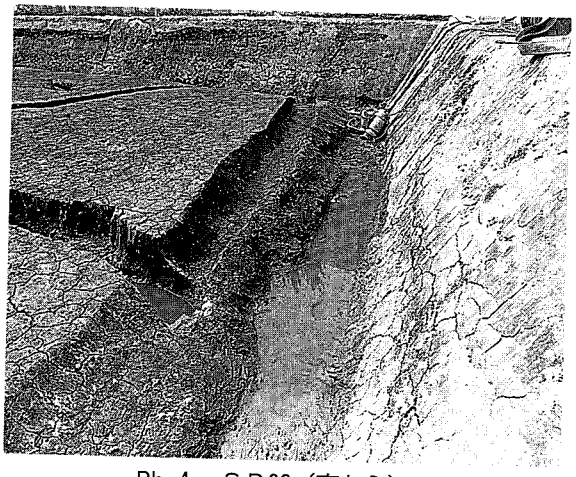
Fig. 6　SD01・02・03土層図（1/40）



Ph. 2　SD01（北から）



Ph. 3　SD02（西から）



Ph. 4　SD03（南から）

色の包含層を掘り込んでいる。西側はＳＫ０４に接続する。東側は発掘区外に伸びる。ＳＫ１５、ＳＤ１７を切る。長さ14.4mまで確認した。ＳＫ０４から東向きへ伸び、Ｄ－７・８で若干北向きに方向を変えるが、その後再び緩やかに東へ向かう。幅は0.4m、深さはＨ－７で15cm、Ｃ－７では２cmとなるが、底面の標高はほとんど変わらない。覆土は１：灰暗茶褐色土　２：暗茶褐色土である。出土遺物は弥生土器片が多いが須恵器片もある。

ＳＤ０３

Ａ－３・４、Ｂ－２～４で検出した南北方向の溝で、両端とも調査区外に伸びる。調査区内で4.7m分確認した。幅0.4m、深さ20cm弱である。覆土は灰暗茶褐色粘質土であるがこの溝が切り込んでいる暗茶褐色の包含層の土と違いがはっきりしないところもあり、溝の形態をはっきり検出できたとは言い切れない。出土遺物は弥生土器片である。

（２）土坑

ＳＫ０４

Ｉ－６・７に位置する不定形の土坑で北側でＳＤ０１、東側でＳＤ０２に接続する。長軸2.1m、短軸1.6m、深さ0.3mである。ＳＢ０６の柱穴であるＳＰ０４を切る。覆土は１：暗茶褐色土　砂粒含む　２：灰暗茶褐色粘質土　黄褐色土粒、炭化物粒含む　３：灰暗茶褐色土　黄褐色土ブロック、黒色土ブロック含む。出土遺物は弥生土器片、須恵器片と瓦片である。

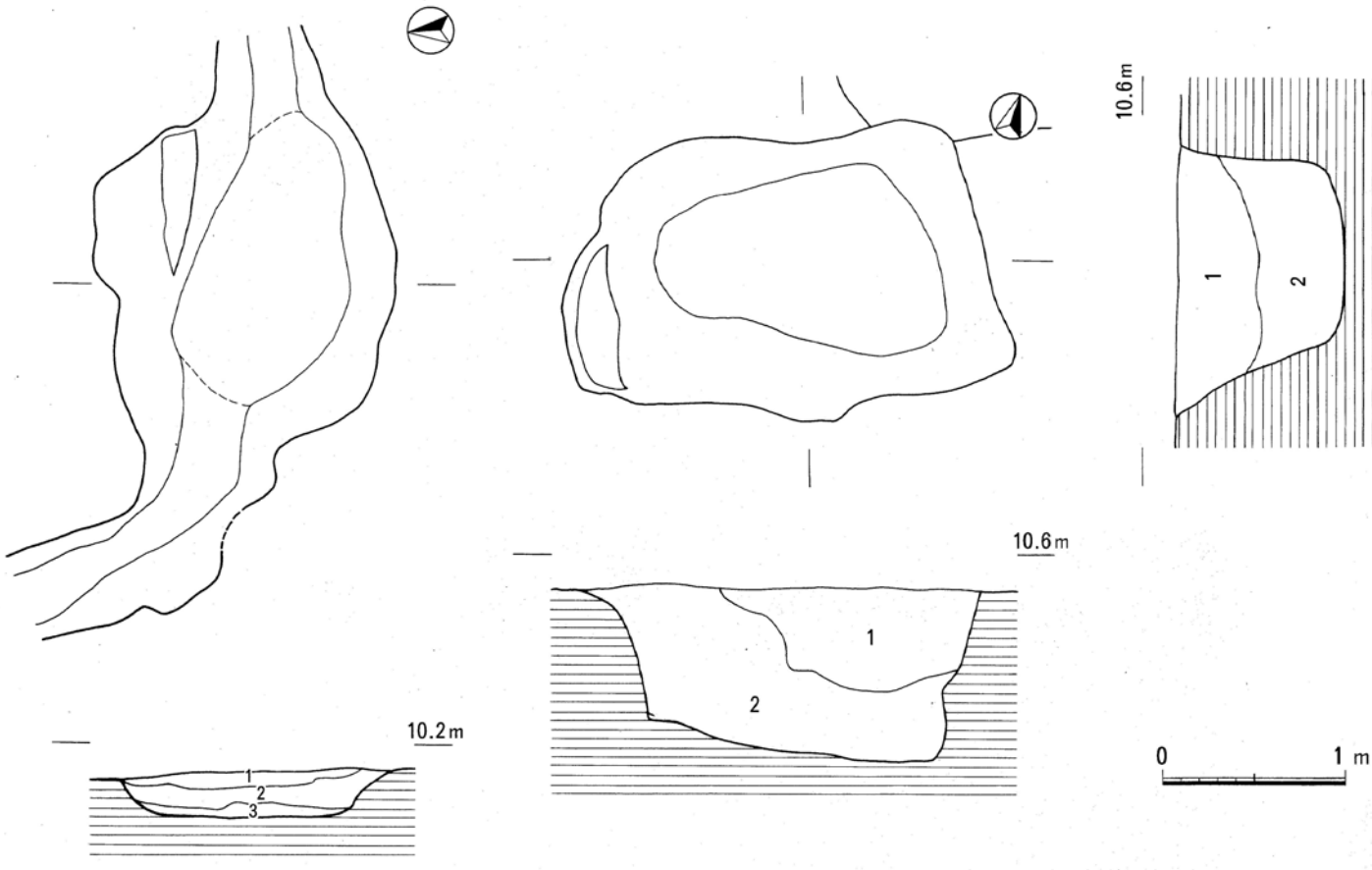


Fig. 7　ＳＫ04・05 実測図（1/40）

Ph. 5　ＳＫ04（東から）

Ph. 6　ＳＫ05（南から）

ＳＫ０５

Ｆ・Ｇ－19・20で検出した不定形土坑である。長軸2.2m、短軸1.5m、深さ0.9m。覆土は１：灰褐色粘土　灰褐色砂ブロック、径５cm程度の黄褐色粘土ブロックを含む　２：灰褐色砂　黄褐色粘土ブロック、灰褐色粘土ブロックを含む。

出土遺物は弥生土器片が多いが、須恵器片が２点出土している。１は須恵器の甕の口縁部である。

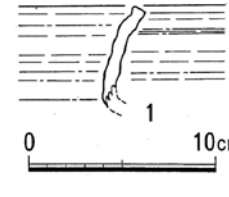


Fig. 8　ＳＫ05 出土異物実測図（1/4）

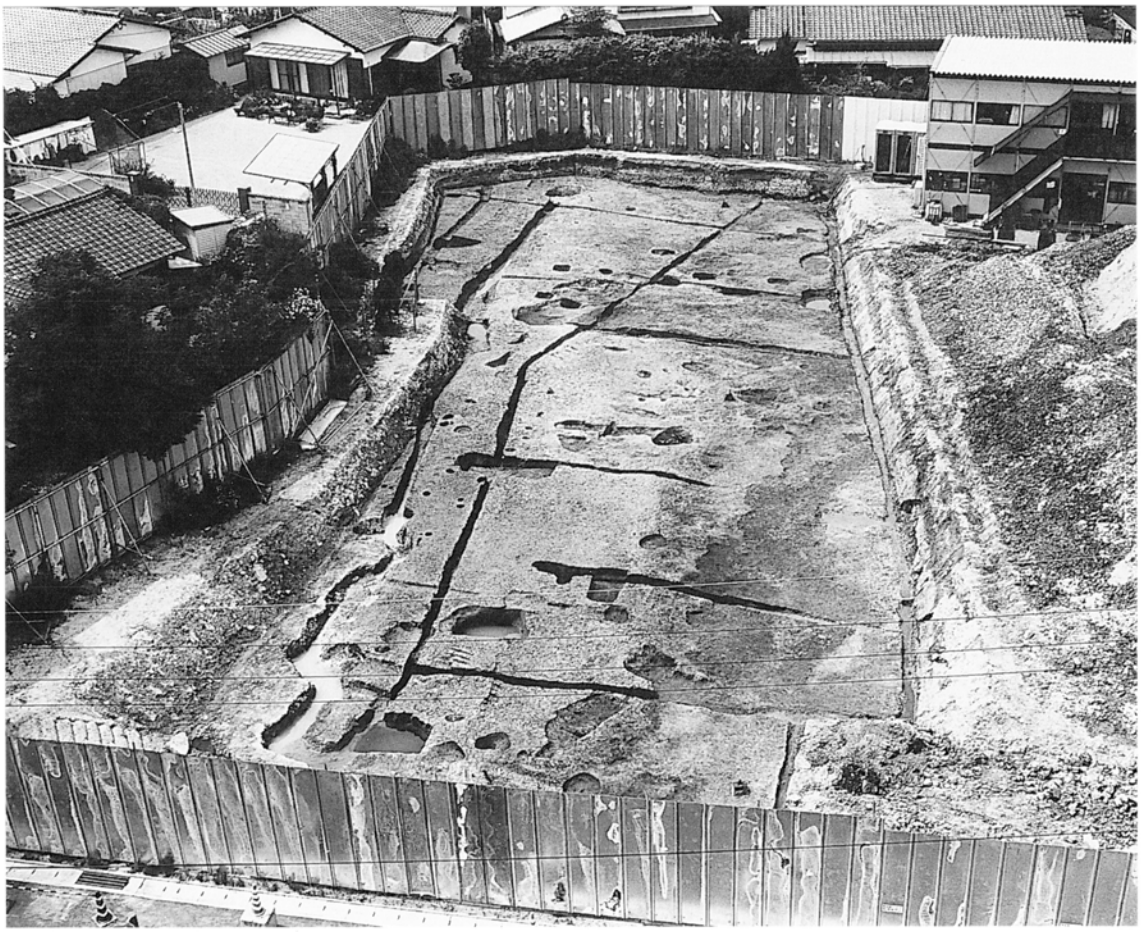
3．第２面の調査

包含層を取り去った後に調査した面である。西側はロームが基盤であったが、中央部は灰色粘土、東側は粗砂となる。標高は、西側は第１面のままで10.5m、東側にいくにつれて徐々に下がって、東端で9.9mである。弥生時代中期から古墳時代初頭の遺構を調査した。掘立柱建物１棟、溝２条、井戸４基、土坑18基を検出した。溝、土坑はしっかりとした掘り込みをもつものは少なく、小さな窪みやなだらかな落ち込みといった感じである。台地の落ち際なので、集落の縁辺部に位置するのであろう。

（１）建物

ＳＢ０６

調査区北側、西端のＦ・Ｇ・Ｈ－６～８で検出した掘立柱建物である。さらに西側に伸びる可能性もあるが、検出した梁行１間、桁行２間分ですべてであろう。柱間は2.8m前後である。北側の柱列はＮ－74°－Ｅ、南側の柱列はＮ－77°－Ｅであり、東側が若干開き気味である。柱穴は方形の掘方である。深さは30cm程しかなく、かなり削平されているようである。ＳＰ０１、ＳＰ０３、ＳＰ０６には径25～30cmの円形の柱痕跡が認められた。ＳＤ０１、ＳＫ０４に柱穴ＳＰ０４が切られる。また、ＳＰ０２・０５が攪乱で破壊されている。ＳＰ０６の東側に円形のピットＳＰ０７があり、北側の柱列に揃う。梯子用のピットであろうか。



Ph. 7　第２面調査区全景（南から）

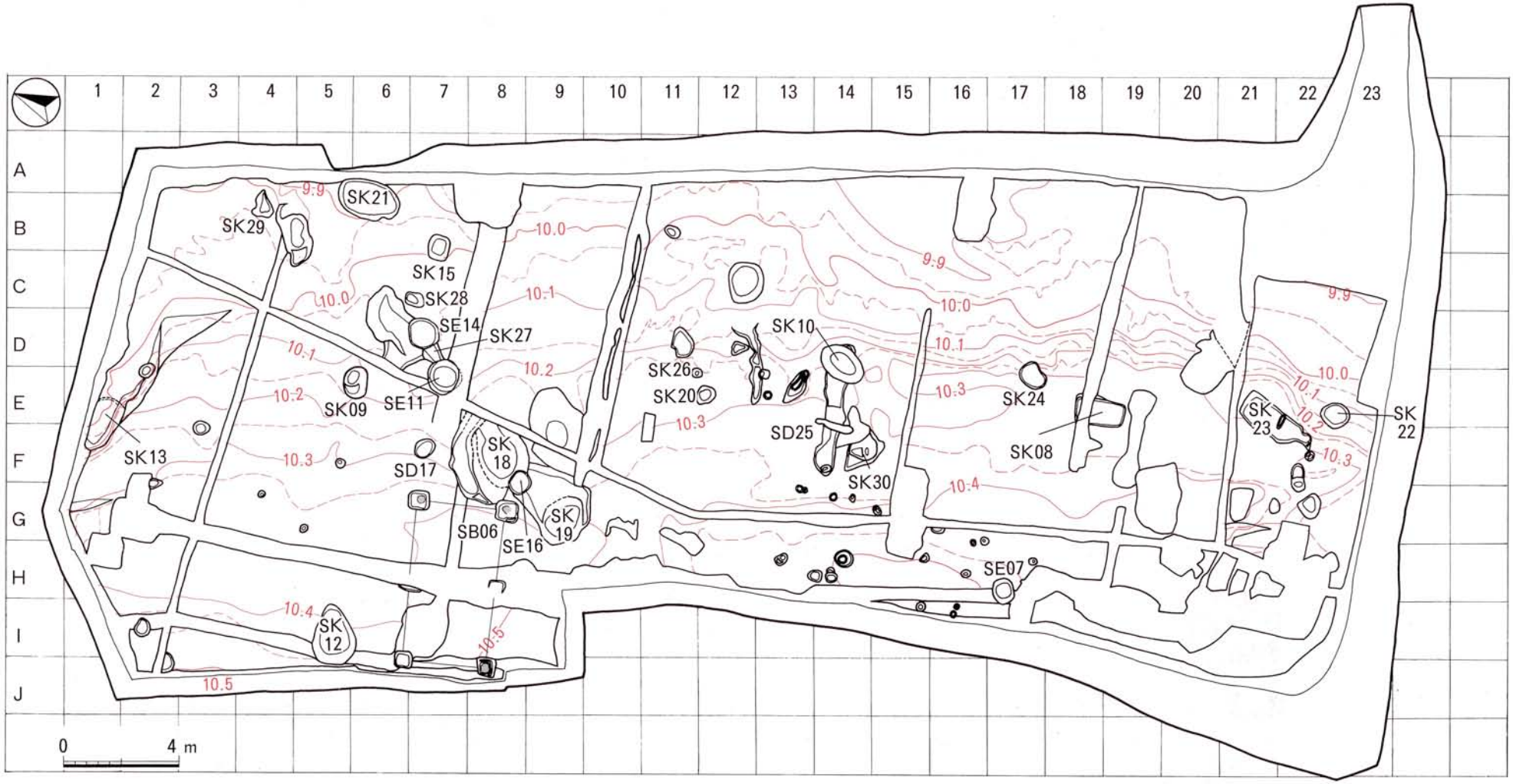
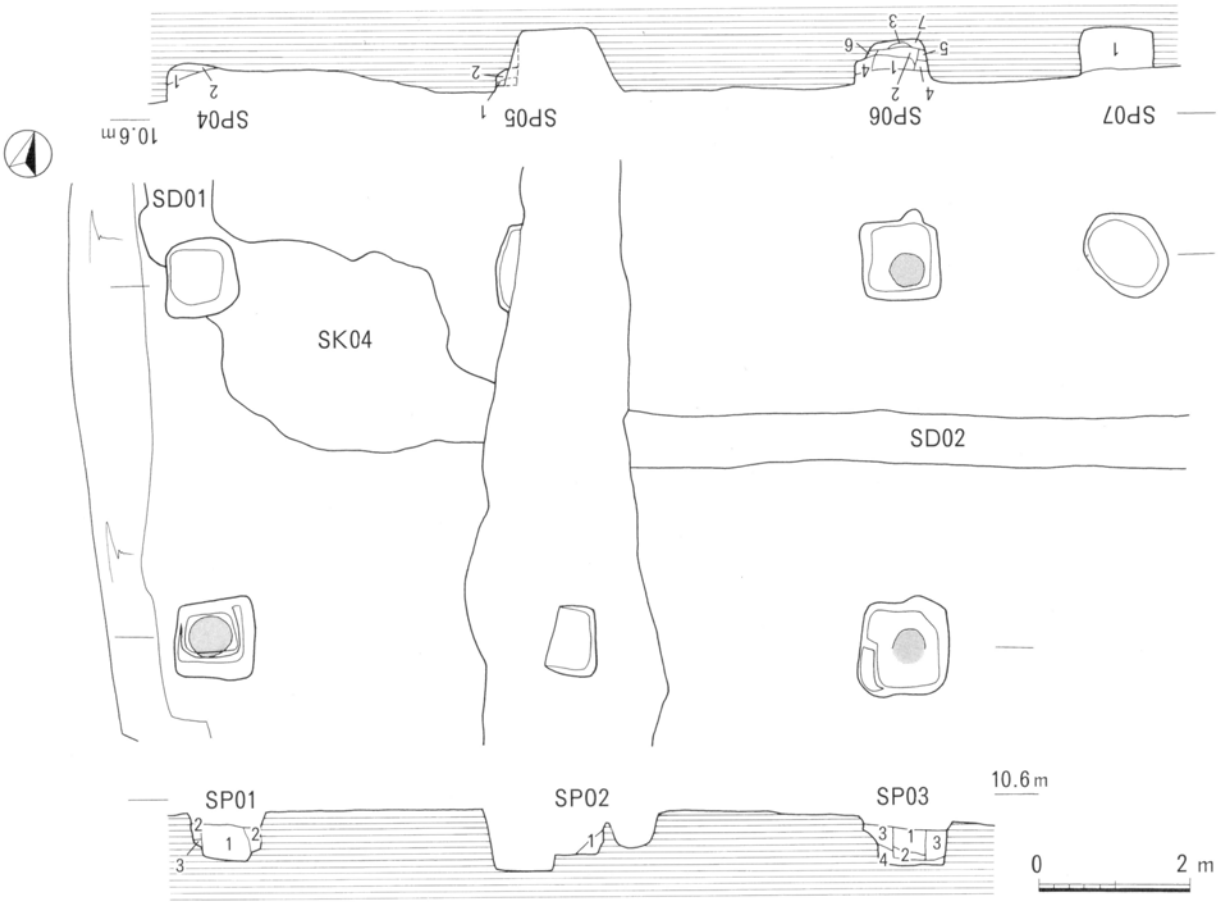


Fig. 9　第２遺構分布図（1/200）



ＳＰ０１
　１：暗茶褐色土　ロームブロック含む
　２：黒色土　ロームブロック含む
　３：黒色土とローム
ＳＰ０２
　１：暗褐色土
ＳＰ０３
　１：灰暗褐色土　ロームブロックと径５cm程度の黄灰白色粘土ブロック含む
　２：灰黒色粘質土
　３：暗褐色土　ロームブロックと径５cm程度の黄灰白色粘土ブロック多く含む
　４：灰色砂と黄灰白色粘土ブロック
ＳＰ０４
　１：黒色土
　２：暗灰褐色粘質土
ＳＰ０５
　１：黄褐色粘土（ローム）
　２：暗灰褐色粘質土
ＳＰ０６
　１：暗褐色土
　２：暗灰褐色粘土
　３：暗灰褐色粘土と黄灰白色粘土
　４：黒色土　黄灰白色粘土ブロック含む
　５：暗灰褐色土と灰色砂
　６：４層より灰色味のある黒色土
　７：灰色砂と黄灰白色粘土
ＳＰ０７
　１：黒色土

Fig.10　ＳＢ06実測図（1/60）

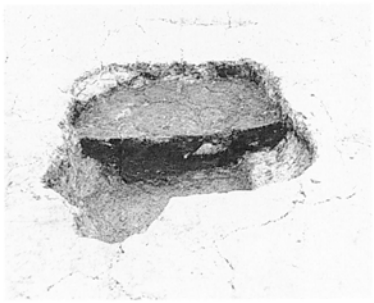
Ph. 8　ＳＰ01土層（南から）

Ph. 9　ＳＰ02土層（南から）

Ph.10　ＳＰ03土層（南から）

Ph.11　ＳＰ04土層（北から）

Ph.12　ＳＰ05土層（北から）



Ph.13　ＳＰ06土層（北から）

柱穴からは弥生土器が出土している。２～４はＳＰ０３、５～８はＳＰ０４、９はＳＰ０６、10はＳＰ０７出土。２・５・６は鋤形口縁の甕の口縁部である。７は甕の底部で復元底径7.3cmである。４は断面M字突帯の壺で外面は丹塗り。８・９は広口壺の口縁。８は鋤形口縁で復元口径29.4cm、９は素口縁で復元口径24.7cmである。３は壺の底部で復元底径5.9cmである。９は甕の口縁部である。内面にハケメを残し粗いつくり。

弥生時代中期中頃の土器が多いが、９より建物の時期は後期の前半に下るか。

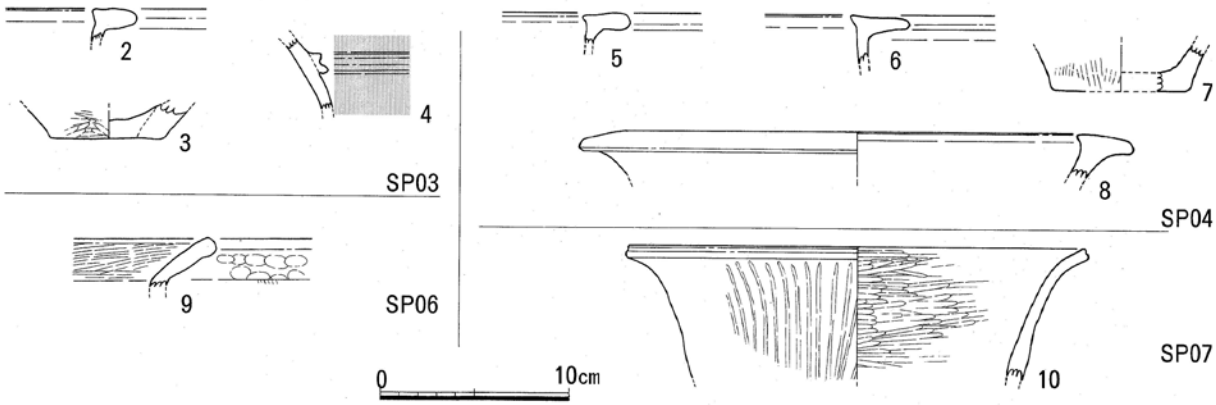


Fig.11　ＳＢ06柱穴出土遺物実測図（1/4）

Ph.14　ＳＢ06（西から）

（2）溝

ＳＤ１７

Ｅ～Ｇ－７・８で検出した溝状遺構である。長さ3.5m、幅0.8m、深さ0.2m。東西方向の溝であるが、湾曲している。ＳＤ０２に切られ、ＳＫ１８を切る。弥生土器が出土した。11は鋤形口縁の甕の口縁部である。復元口径27.5cm。出土遺物から弥生時代中期後半の溝と考えられる。

ＳＤ２５

Ｄ～Ｆ－14で検出した東西方向の溝である。長さ2.3m、幅0.3m、深さ0.2m。ＳＫ１０に切られる。覆土は１：暗茶褐色土　２：茶褐色土である。弥生土器片が多いが、古式土師器の破片も出土しており、ＳＫ２０出土の土器と接合した（Fig.37）。出土遺物から古墳時代前期の溝と考えられる。

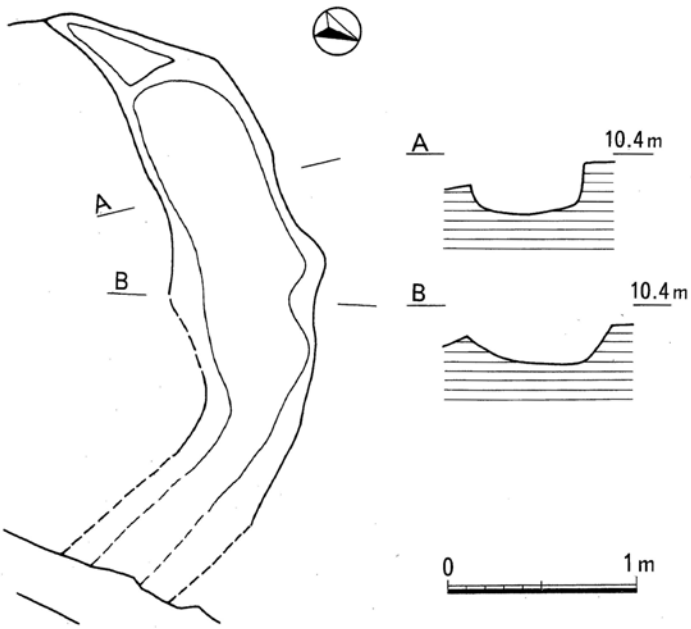


Fig.12　ＳＤ17実測図（1/40）

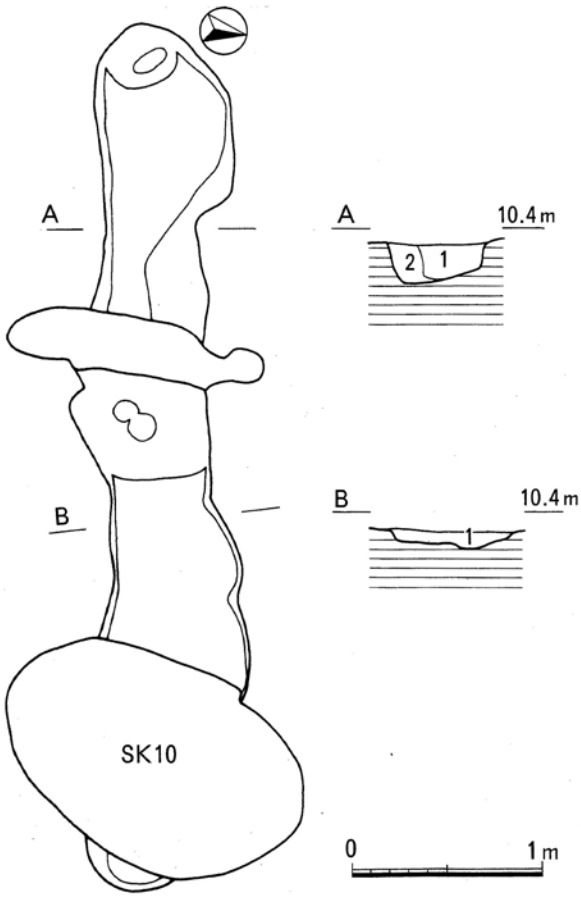


Fig.13　ＳＤ25実測図（1/40）

Ph.15　ＳＤ17（東から）

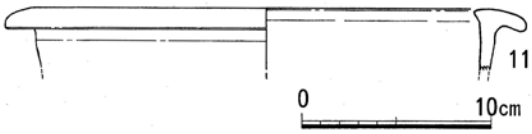


Fig.14　ＳＤ17出土遺物実測図（1/4）

Ph.16　ＳＤ25（東から）

（３）井戸

ＳＥ０７

Ｈ・Ｉ－17に位置する円形素掘井戸である。上部は暗渠による攪乱で一部破壊されている。直径0.7～0.8m、深さ２ｍである。八女粘土を掘り抜き、硬砂層に達している。覆土は１：暗茶褐色土　径５～10cmのロームブロックと白色粘土を含む　２：上層より暗い暗茶褐色土　径５cm以下のロームブロック含む　３：白色粘土　黒色土を含む　４：ロームに黒色土を含む　５：黒色土　締まりなく柔らかいローム粒含む。

底面近くで完形の壺形土器が出土した以外は遺物は少ない。12は弥生時代後期前半の複合口縁壺である。頸部下端に断面三角形の突帯が付く。突帯は４ヶ所で、指圧でついたと思われるくぼみがある。頸部の締まりはゆるい。外面に黒斑がみられる。口径19.3cm、頸部径14.5cm、胴部最大径27.6cm、底径8.8cm、器高38.4cm。そのほかは弥生土器の破片が少量出土したのみである。

12の土器から弥生時代後期中頃の井戸と考えられる。

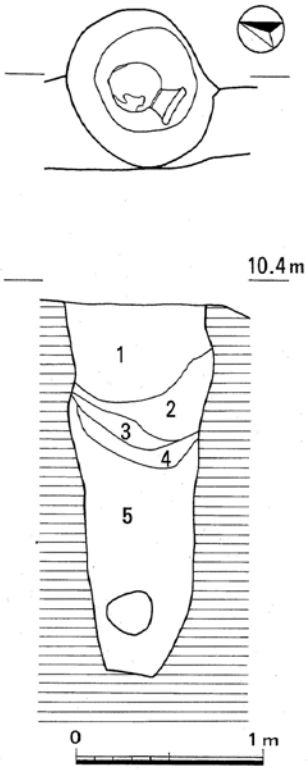


Fig.15　ＳＥ07 実測図（1/40）

Ph.17　ＳＥ07（西から）

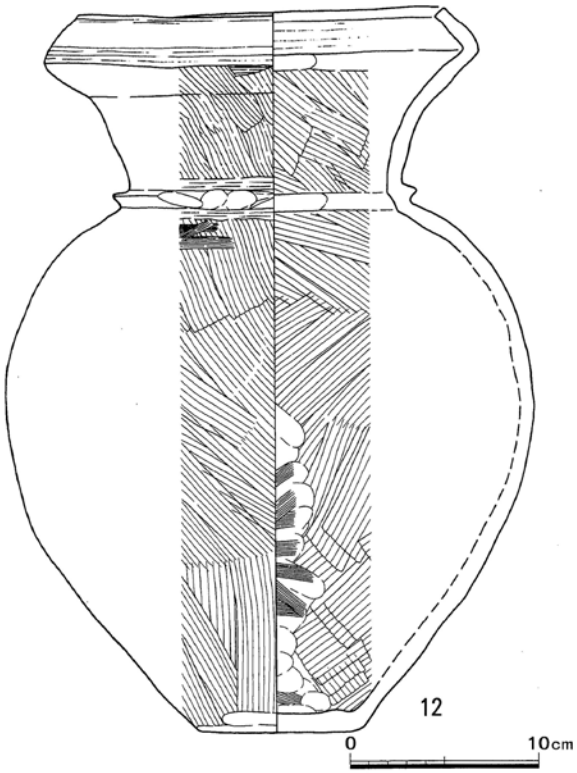
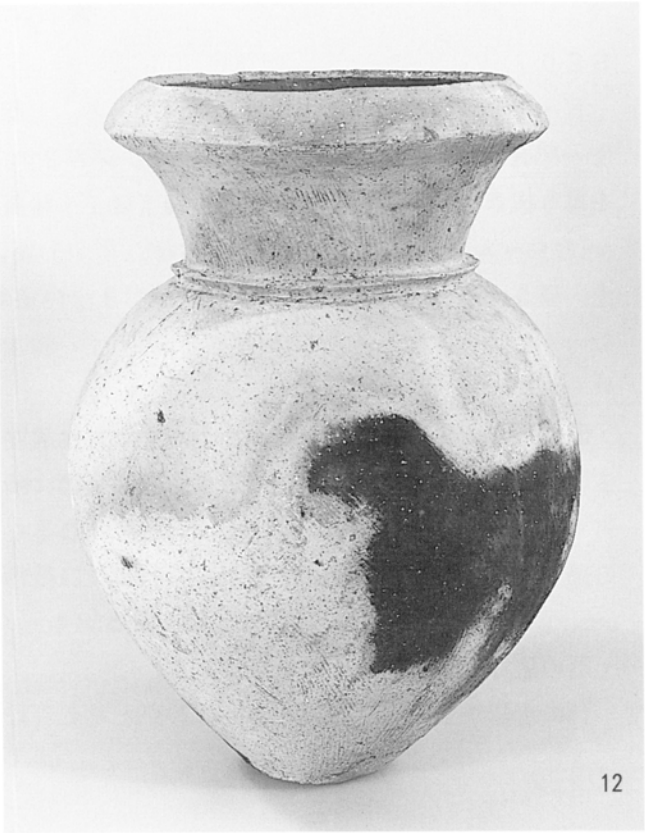


Fig.16　ＳＥ07 出土遺物実測図（1/4）



Ph.18　ＳＥ07 出土遺物（約1/40）

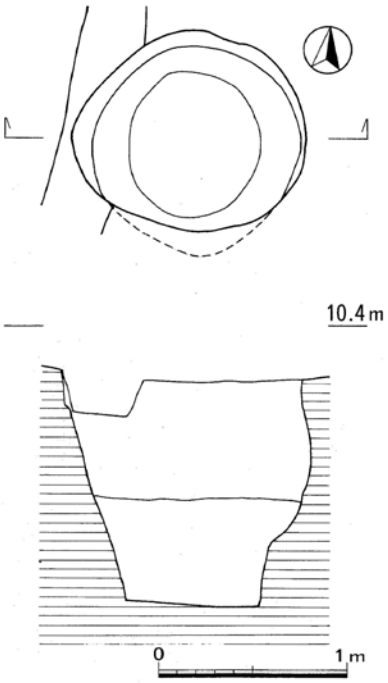


Fig.17　ＳＥ11 実測図（1/40）

Ph.19　ＳＥ11（南から）

ＳＥ１１

Ｄ・Ｅ－７で検出した円形素掘井戸である。直径1.1～1.2m、深さ1.2m。近年の暗渠に一部が攪乱される。ＳＫ２７を切る。

出土遺物は弥生土器である。13は甕の口縁部で、復元口径22.2cm。14は甕の底部で、底径7.8cm。15は無頸壺の口縁部で、復元口径18.0cm。16・17は小型の広口壺の口縁部で復元口径はそれぞれ13.8、

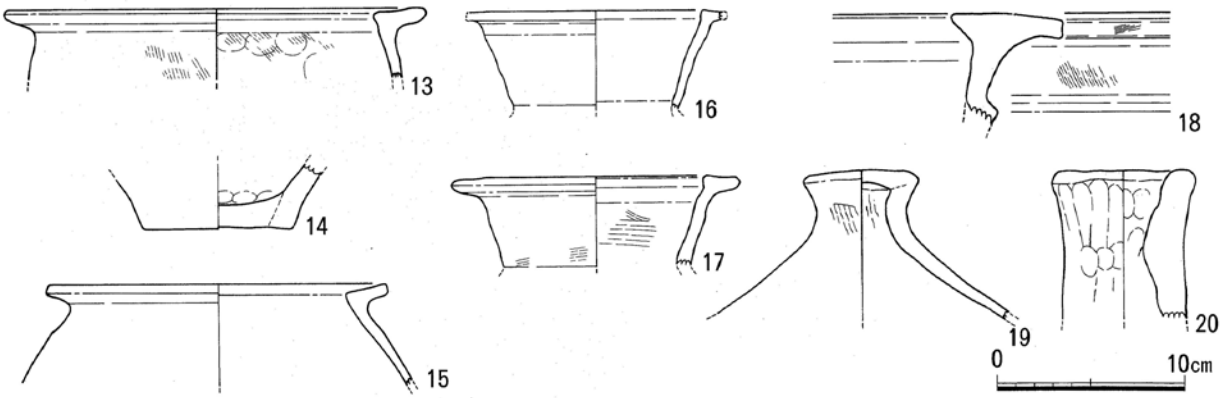


Fig.18　ＳＥ11 出土遺物実測図（1/4）

15.2cmである。18は鉢（瓢形土器？）の口縁部である。19は蓋。20は器台である。

出土遺物から弥生時代中期中頃の井戸と考えられる。

ＳＥ１４

Ｄ－６・７で検出した円形素掘井戸である。直径1.0～1.1m、深さ0.6m。ＳＫ２７を切る。覆土は１：黒色土　砂粒含む　２：黒色土である。

弥生土器が出土している。21～25は甕の口縁部である。21・22は断面三角形の突帯をもつ。26・27は無頸壺である。26は復元口径19.0cmを測る。27の口縁下には暗文風のミガキがみられ、その下に断面三角形の突帯が付く。28～33は広口壺の口縁部で、28～31は鋤形口縁、32～34は素口縁である。復元口縁は28が28.4cm、29が29.0cm、30は小型で12.0cm、32が36.0cm、33が25.1cmである。32は内外面丹塗りである。35は鉢で、口縁下に断面三角形の突帯を巡らす。復元口径26.7cmである。

出土遺物から弥生時代中期中頃から後半の井戸と考えられる。

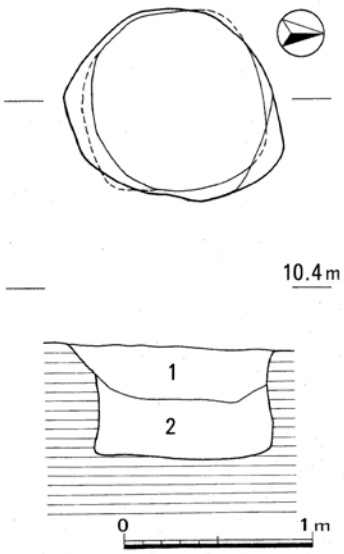


Fig.19　ＳＥ14 実測図（1/40）

Ph.20　ＳＥ14（南から）

Fig.20　ＳＥ14 出土遺物実測図（1/4）

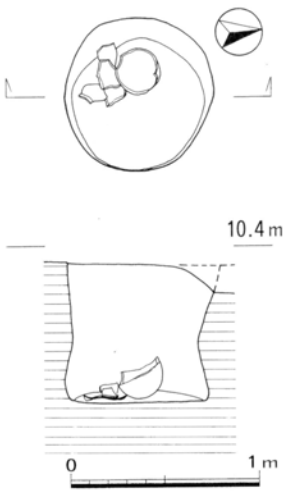


Fig.21　ＳＥ16 実測図（1/40）

Ph.21　ＳＥ16（北から）

ＳＥ１６

Ｆ・Ｇ－８・９に位置する円形素掘井戸である。直径0.8m、深さ0.7m。ＳＫ１８、ＳＫ１９を切る。

弥生土器と古墳時代の土師器が出土している。36は土師器の短頸直口壺である。井戸底面近くより出土した。口径14.2cm、胴部最大径23.6cm、器高25.8cm。37は直口壺である。下半部を欠損する。磨滅が著しい。口径12.4cm、胴部最大径24.0cm。

出土土器より古墳時代前期の井戸と考えられる。

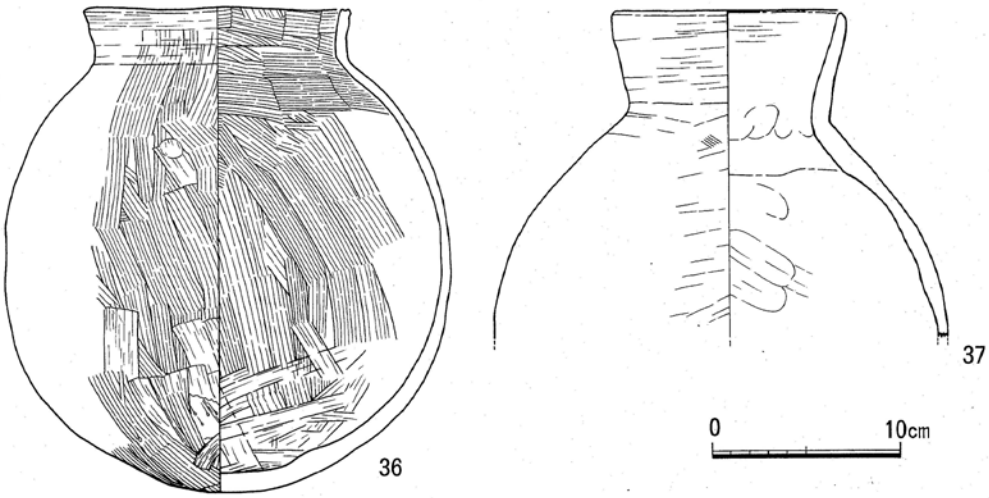


Fig.22　ＳＥ16 出土遺物実測図（1/4）

Ph.22　ＳＥ16 出土遺物（約1/4）

（4）土坑

ＳＫ０８

Ｅ－18・19で検出した長方形土坑である。長軸1.7m、短軸0.9m、深さ0.3m。覆土は

１：暗茶褐色粘質土　粒子細かく、締まる

２：黒色粘質土　粒子細かい。

弥生土器、古墳時代の土師器が出土している。38は土師器の甕の底部である。やや尖底気味の丸底。39は高坏の軸部である。

38・39の土器より古墳時代前期の土坑と考えられる。

ＳＫ０９

Ｅ－５・６に位置する楕円形土坑である。長軸1.1m、短軸0.8m、深さ0.3m。覆土は

１：黒色土　灰色粘土ブロック含む　２：

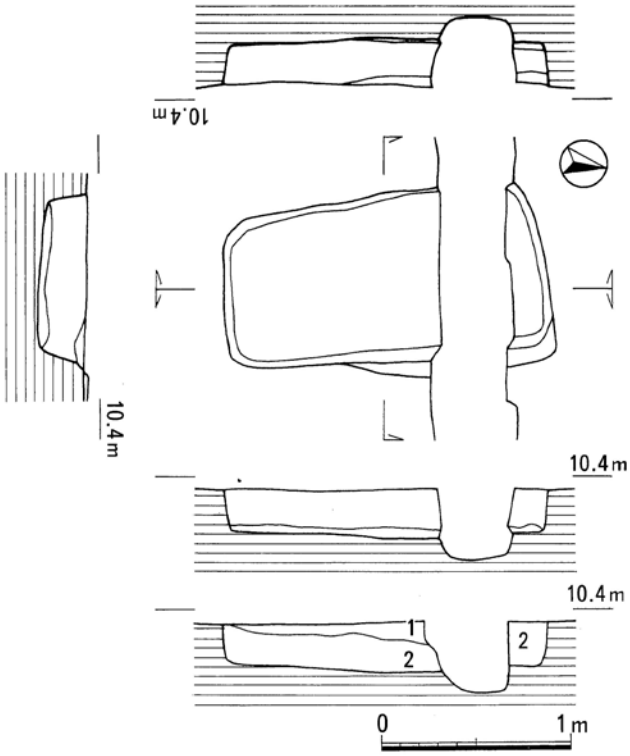


Fig.23　ＳＫ08実測図（1/40）

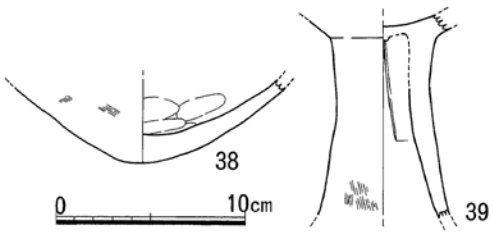


Fig.24　ＳＫ08出土遺物実測図（1/4）

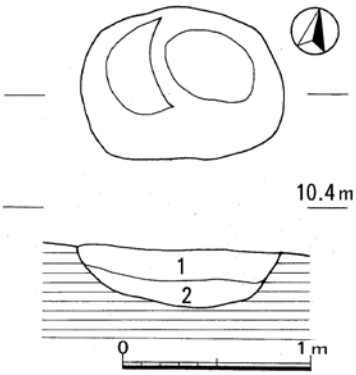


Fig.25　ＳＫ09実測図（1/40）

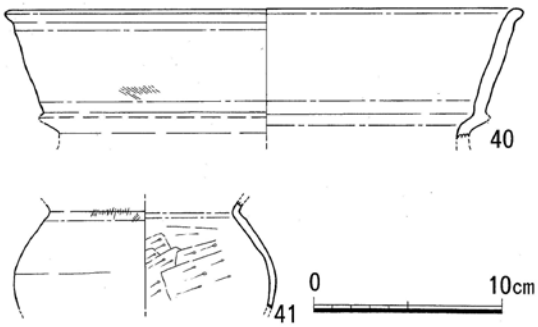
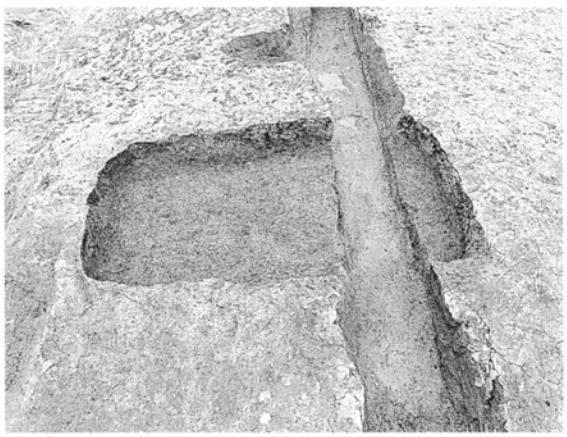


Fig.26　ＳＫ09出土遺物実測図（1/4）



Ph.23　ＳＫ08（東から）

Ph.24　ＳＫ09（南から）

上層より灰色味がある黒色粘質土　灰色粘土ブロック含む。

弥生土器、古墳時代の土師器が出土した。40は山陰系二重口縁壺の口縁部で、復元口径27.4cm。41は山陰系小型壺で復元頸部径10.0cm、復元胴部最大径13.8cm。

40・41より古墳時代前期の土坑と考えられる。

ＳＫ１０

Ｄ・Ｅ－14に位置する楕円形土坑である。長軸1.6m、短軸1.1m、深さ0.3m。ＳＤ２５に切られる。覆土は１：黒色土　焼土含む　２：灰黒色土　３：灰色砂である。

弥生土器が出土した。42は甕の底部である。43は鋤形口縁の直口壺の口縁部である。

42・43より弥生時代後期前葉の土坑と考えられる。

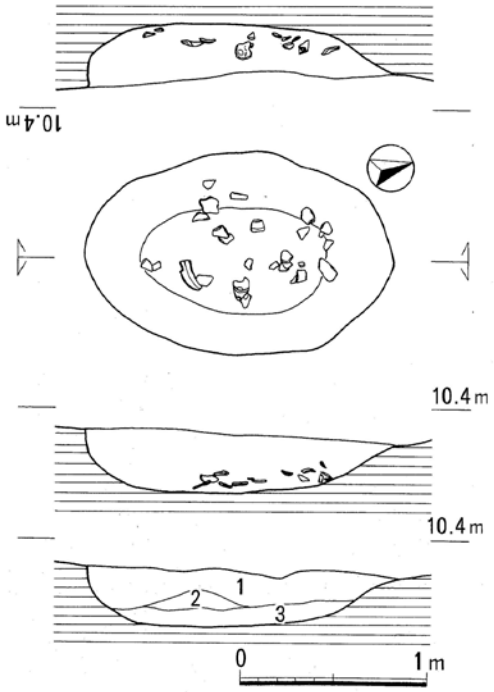


Fig.27　ＳＫ10実測図（1/40）

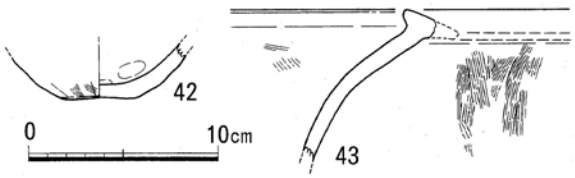
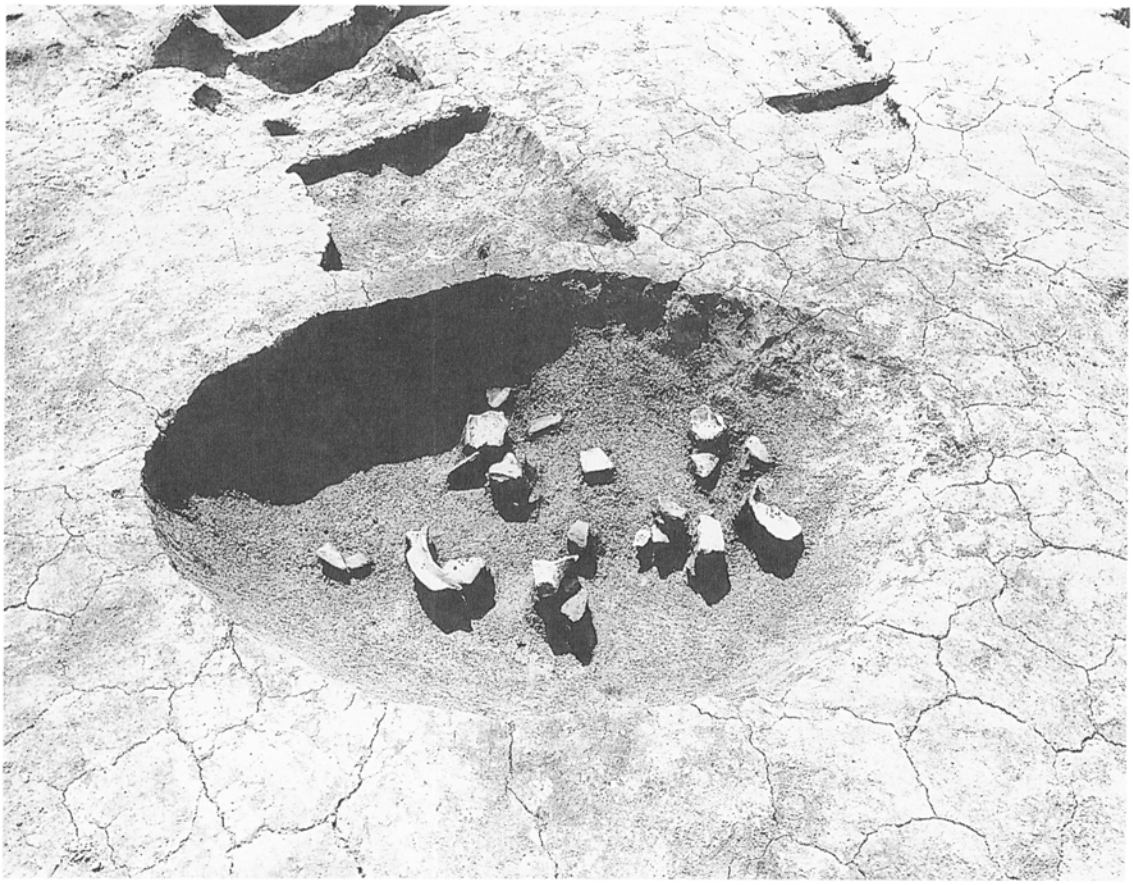


Fig.28　ＳＫ10出土遺物実測図（1/4）



Ph.25　ＳＫ10（東から）

ＳＫ１２

Ｉ・Ｊ－５・６に位置する卵形の土坑である。長軸2.0m、短軸1.5m、深さ0.9m。ＳＤ０１に切られる。覆土は１：黒色土　灰茶褐色粘土ブロック、灰白色粘土ブロック含む　２：灰黒色土　灰黒色粘土多く含む。

遺存状態のよい古式土師器が５点出土している。44～50は布留式土器の甕である。44は口径13.8cm、胴部最大径17.3cm、器高18.1cm。45は口径15.2cm、胴部最大径20.0cm、器高21.5cm。46は口径16.4cm、胴部最大径20.6cm、器高22.1cm。47・48・49はそれぞれ復元口径13.0cm、16.0cm、15.6cm。51は山陰系の甕である。口縁部を欠損する。胴部下半に穿孔がある。胴部最大径30.5cm。52は鉢である。口径23.1cm、器高10.5cm。その他古式土師器片のほか弥生土器の破片も出土している。

出土土器から古墳時代前期の土坑と考えられる。

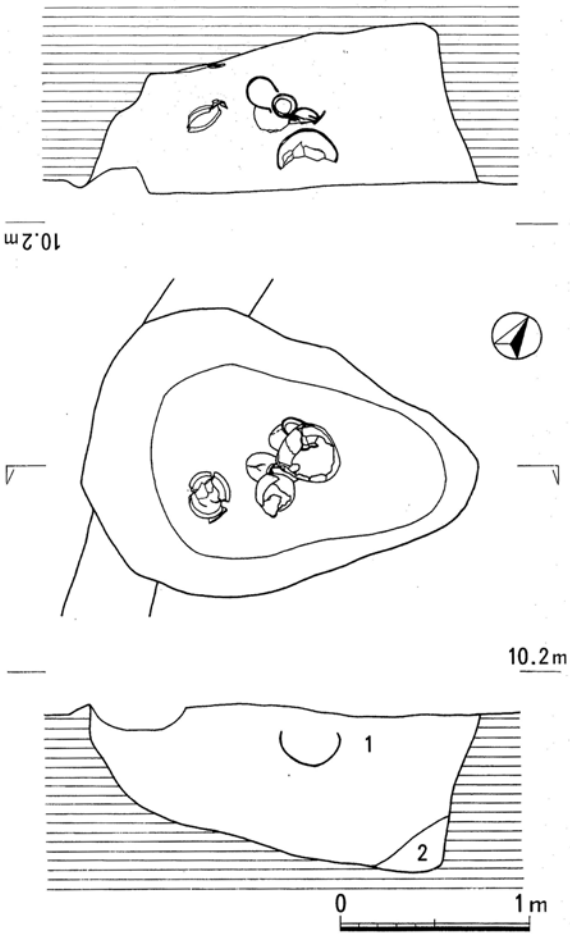
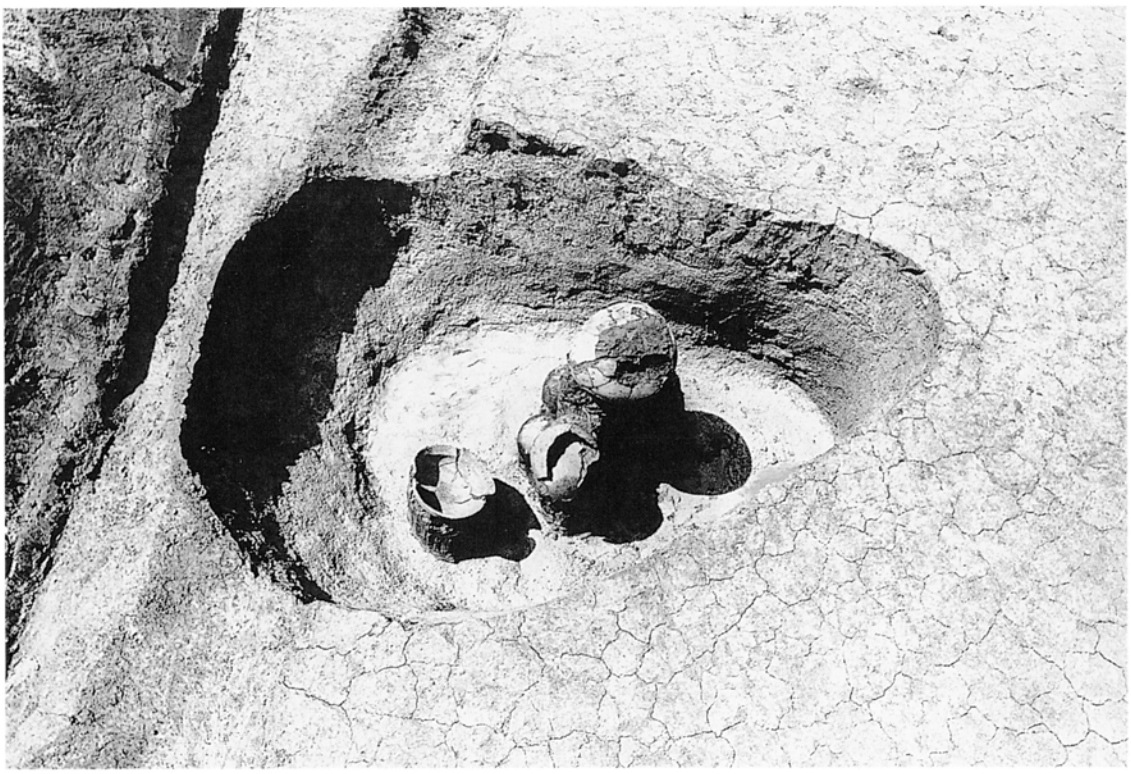


Fig.29　ＳＫ12実測図（1/40）



Ph.26　ＳＫ12（南から）

Ph.27　ＳＫ12（西から）

Ph.28　ＳＫ12（南から）

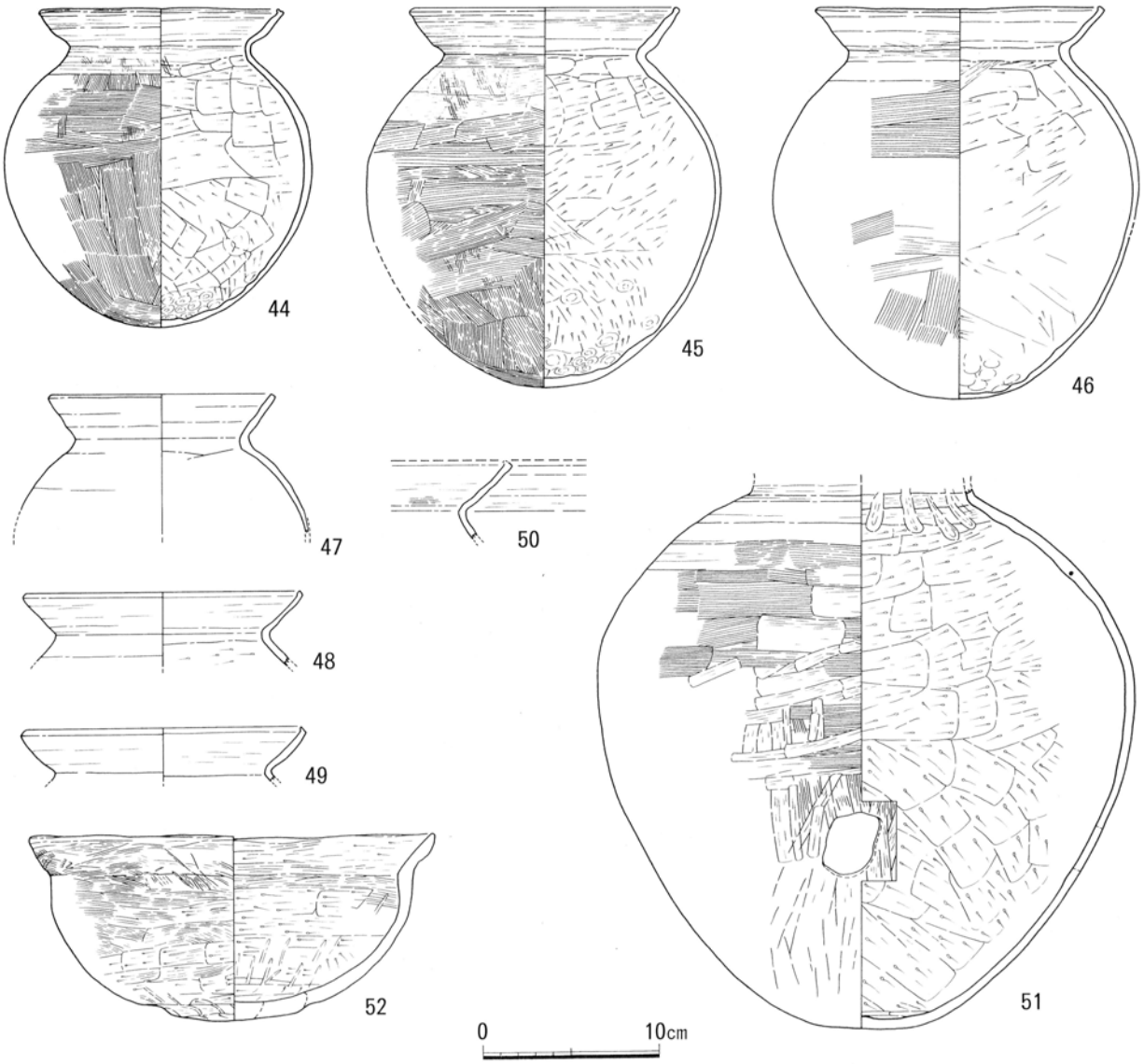
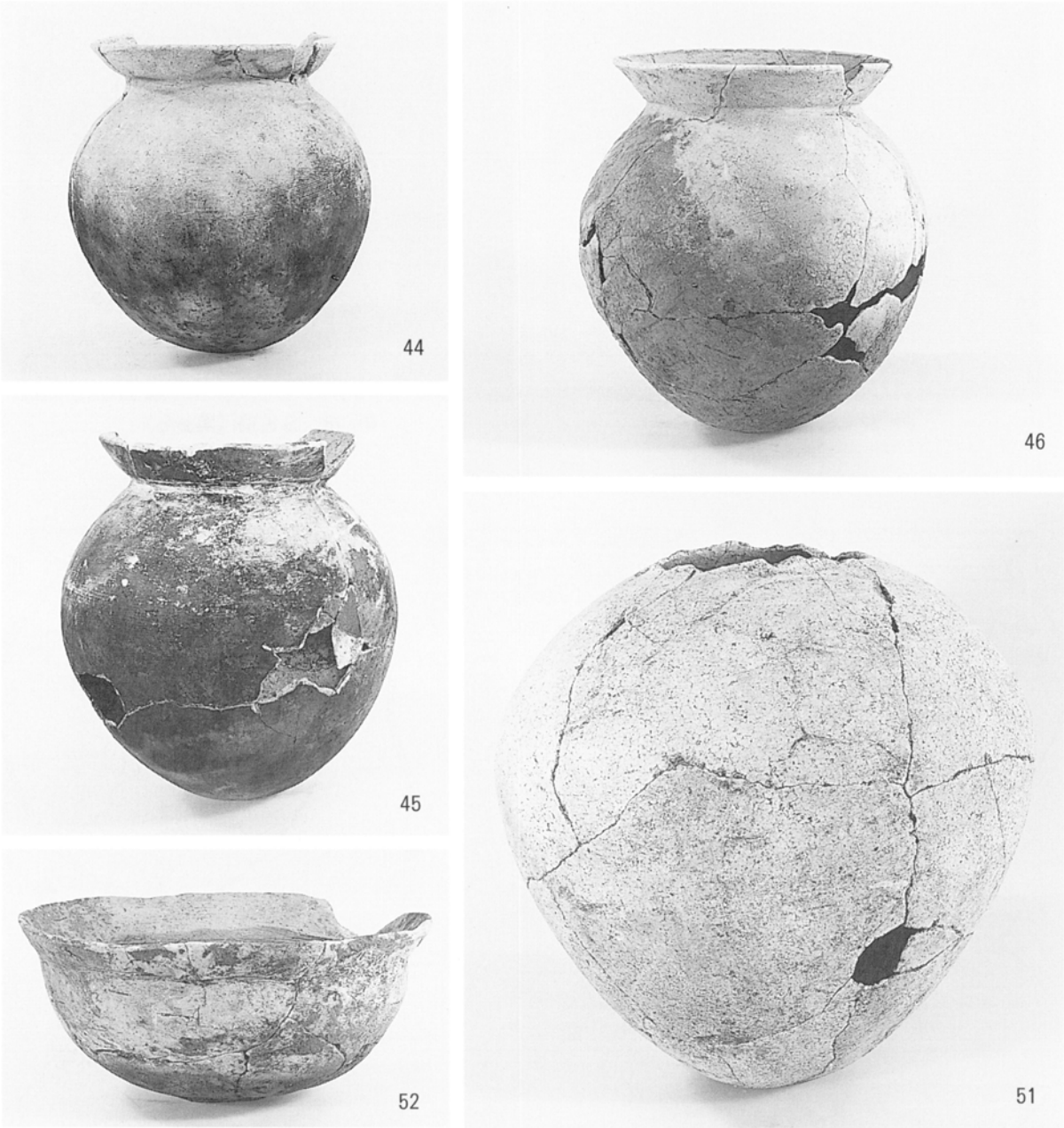


Fig.30　ＳＫ12 出土遺物実測図（1/4）



Ph.29　ＳＫ12 出土遺物（約1/4）

ＳＫ１３

Ｅ・Ｆ－１で検出した土坑である。長軸約２ｍ、短軸約１ｍ、深さ0.2ｍ。北側は発掘区外に伸びる。東側の立ち上がりは確認できなかった。覆土は黒色土である。弥生土器片が出土している。

ＳＫ１５

Ｂ・Ｃ－７に位置する。長軸8.6ｍ、短軸7.3ｍ、深さ0.2ｍの方形土坑である。ＳＤ０２に切られる。覆土は砂混じりの灰褐色土である。弥生時代中期の土器片が出土している。53は鋤形口縁をもつ甕の口縁部である。

ＳＫ１８

Ｅ～Ｇ－８、Ｆ－９で検出した楕円形土坑である。北側、西側を掘りすぎてしまった。長軸2.4ｍ

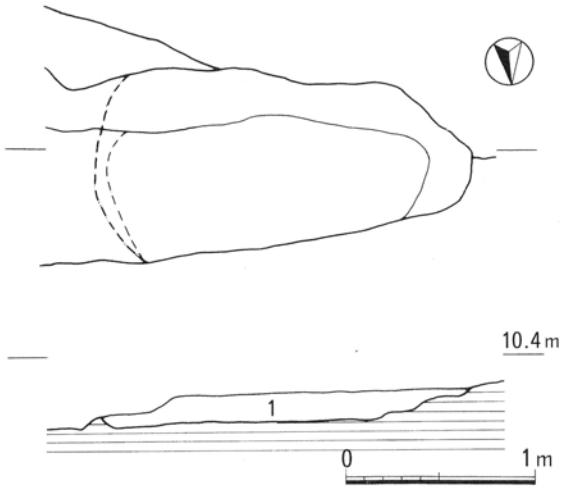
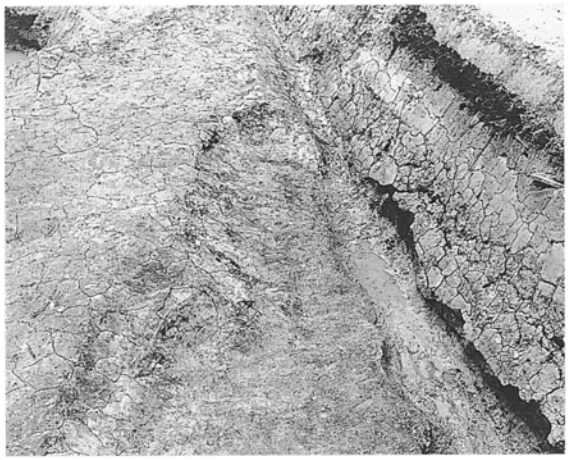


Fig.31　ＳＫ13実測図（1/40）



Ph.30　ＳＫ13（東から）

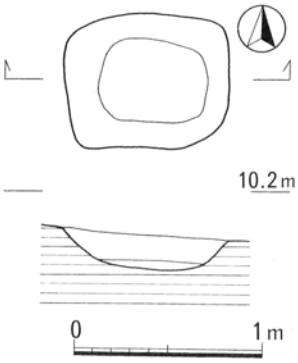


Fig.32　ＳＫ15実測図（1/40）

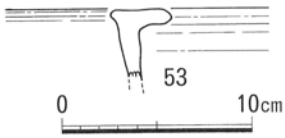
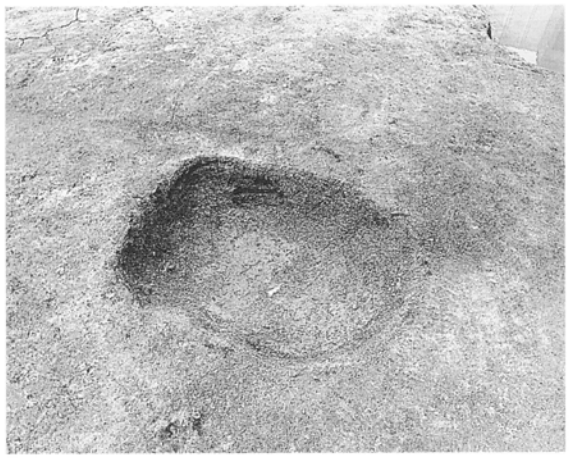


Fig.33　ＳＫ15出土遺物実測図（1/4）



Ph.31　ＳＫ15（南から）

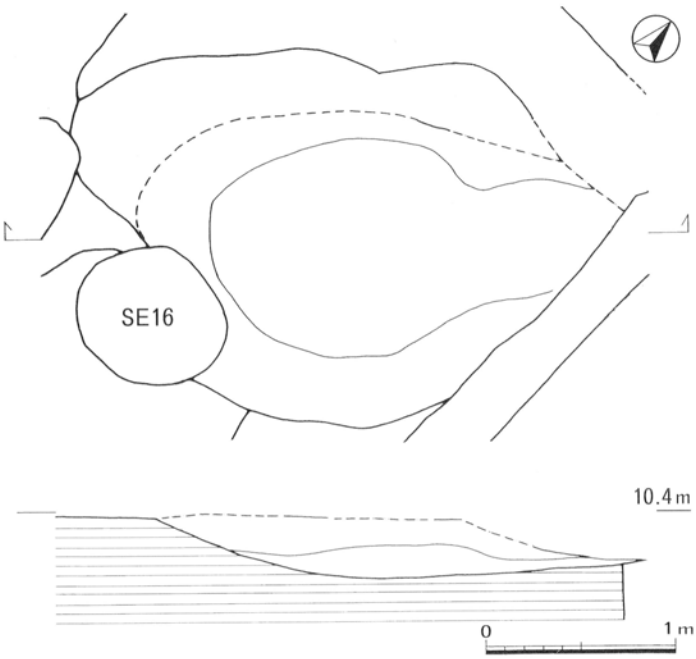


Fig.34　ＳＫ18実測図（1/40）

Ph.32　ＳＫ18（北から）

以上、短軸1.7m、深さ0.3mである。ＳＫ１９を切り、ＳＥ１６、ＳＤ１７に切られる。

弥生時代中期の土器片が出土している。

ＳＫ１９

Ｅ～Ｇ－９で検出した楕円形土坑である。長軸5.3m、短軸2.8m、東側深さ0.3m、西側深さ0.4m。ＳＥ１６、ＳＫ１８に切られる。２カ所に深いところがあり、２つの土坑の重複の可能性がある。

弥生土器片が少量出土した。

Ph.33　ＳＫ19（東から）

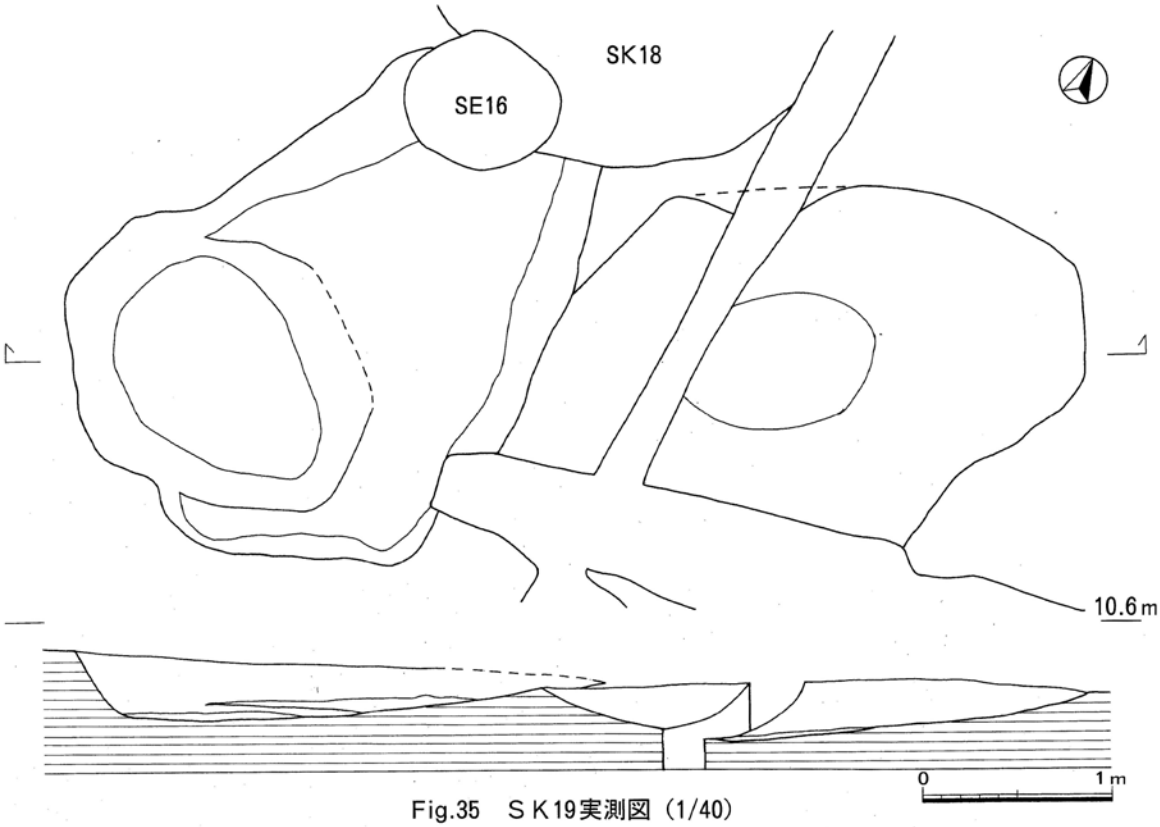


Fig.35　ＳＫ19実測図（1/40）

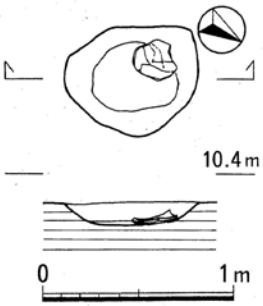
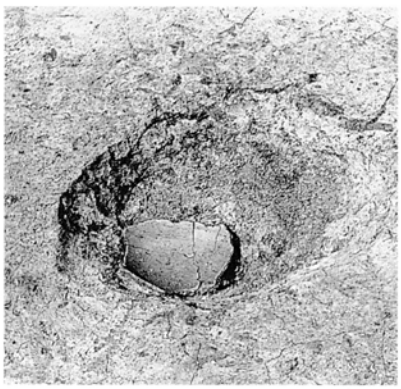


Fig.36　ＳＫ20実測図（1/40）



Ph.34　ＳＫ20実測図（西から）

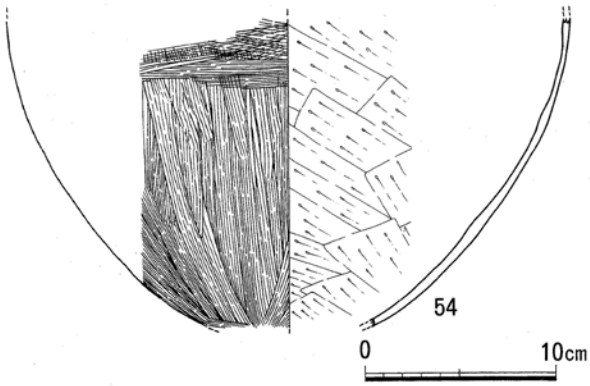


Fig.37　ＳＫ20出土遺物実測図（1/4）

ＳＫ２０

Ｅ－12に位置する円形土坑である。径0.7m、深さ0.1m。覆土は黒色土である。

底面より54の山陰系の古式土師器の甕の胴部が出土した。この土器とＳＤ２５出土の土器が接合している。復元胴部最大径29.6cm。調整は外面胴部タテハケ後ヨコハケ、胴部下半タテハケ。内面ケズリ。

出土遺物から古墳時代前期の土坑と考えられる。

ＳＫ２１

Ａ・Ｂ－５・６で検出した楕円形土坑である。長軸2.2m、短軸1.3m、深さ0.2m。覆土は灰褐色土である。中央で木材が出土したが加工痕は認められなかった。

弥生土器が出土した。55は甕の底部である。復元底径8.0cm。56は鋤形口縁の広口壺の口縁部。復元口径18.0cm。57は壺の底部。復元底径4.0cm。58は鉢である。復元口径12.4cm。

出土遺物から弥生時代中期中頃の土坑と考えられる。

ＳＫ２２

Ｅ－22・23に位置する円形土坑で、径は1.0m、深さ0.1mである。覆土は黒色土である。遺物は出土しなかった。

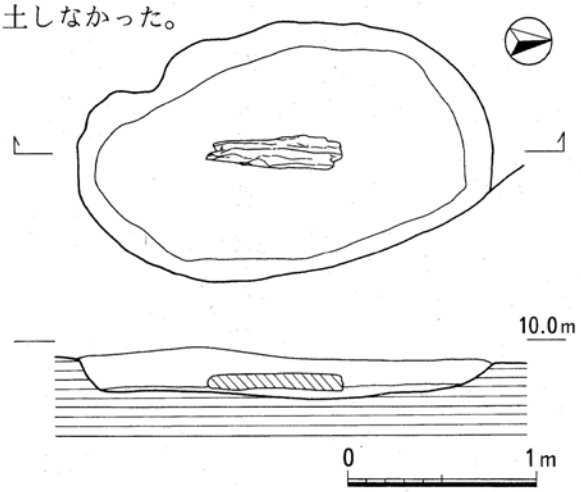
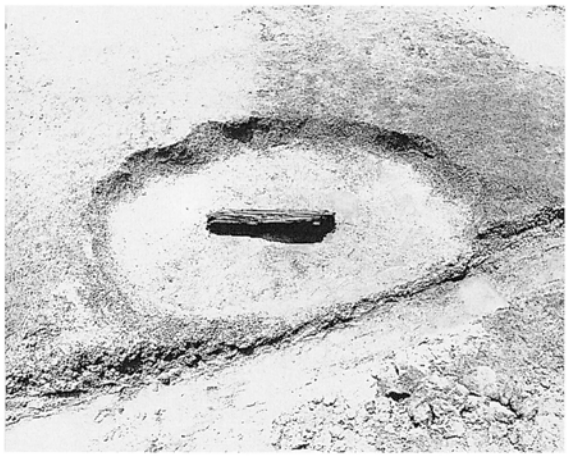


Fig.38　ＳＫ21実測図（1/40）



Ph.35　ＳＫ21（東から）

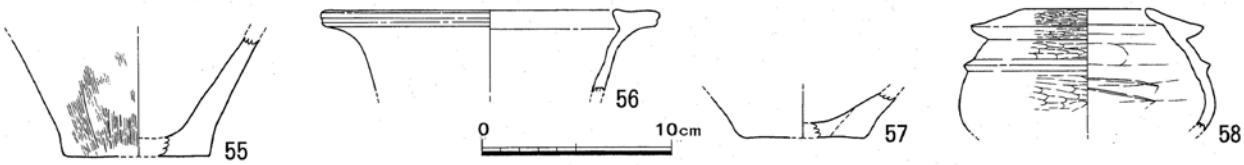


Fig.39　ＳＫ21出土遺物実測図（1/4）

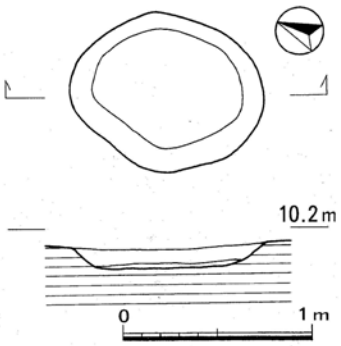


Fig.40　ＳＫ22実測図（1/40）

Ph.36　ＳＫ22（東から）

ＳＫ２３

Ｅ・Ｆ－21・22で検出した不定形土坑。長軸2.8m、短軸1.0m、深さ0.2m。一部0.3mと深い部分がある。覆土は黒色土である。

弥生土器が出土した。59・60は甕の口縁部、61・62は鋤形口縁の無頸壺の口縁部である。61は復元口径27.8cmを測る。63は壺の底部である。磨滅が著しいが、ハケの痕跡が残る。復元底径12.2cmである。

出土土器より弥生時代中期中頃から後半の土坑と考えられる。

ＳＫ２４

Ｄ・Ｅ－17・18に位置する楕円形土坑である。長軸1.0m、短軸0.7m、深さ0.7m。覆土は黒色土である。

弥生土器の小破片が３点出土したのみである。

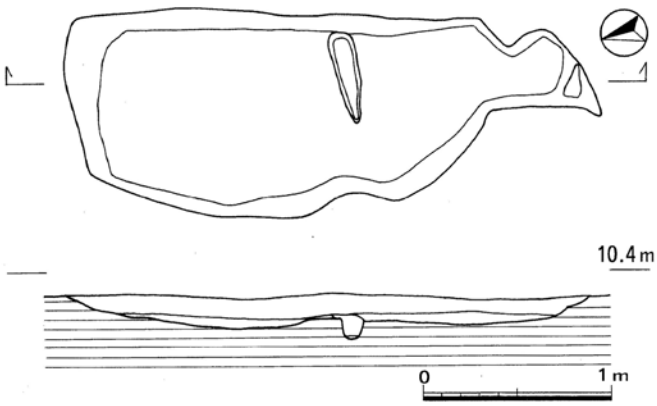


Fig.41　ＳＫ23実測図（1/40）

Ph.37　ＳＫ23（西から）

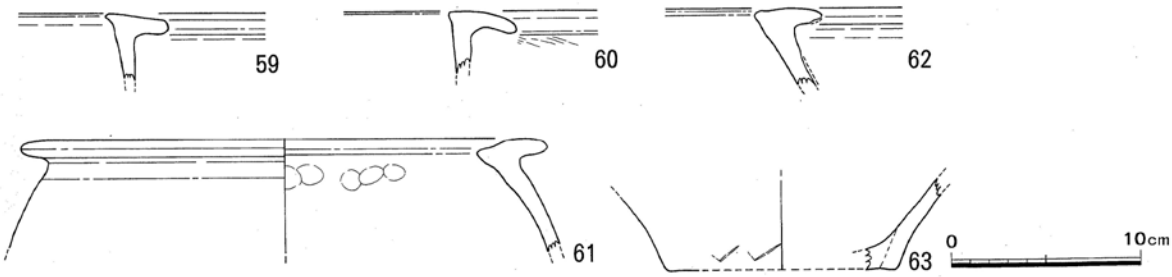


Fig.42　ＳＫ23出土遺物実測図（1/4）

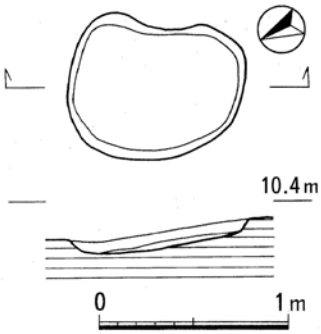


Fig.43　ＳＫ24実測図(1/40)

Ph.38　ＳＫ24（東から）

ＳＫ２６

Ｄ－11に位置する不定形の小土坑である。長軸1.0m、短軸0.7m、深さ0.1m。覆土は灰褐色土である。弥生土器の小片が出土した。

ＳＫ２７

Ｄ－７に位置する土坑で、ＳＥ１１とＳＥ１４に切られる。残存部の幅0.6m、深さ0.1mである。弥生土器が出土した。64は鋤形口縁の直口壺の口縁部である。

ＳＫ２８

Ｃ－６・７で検出した不定形の小土坑である。長軸2.5m、短軸1.4m、深さ0.2m。弥生土器の破片が７点出土している。

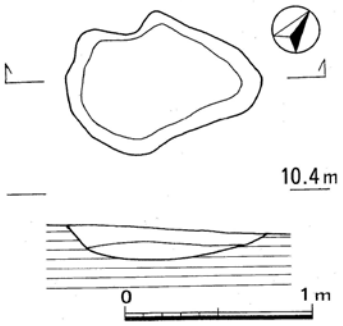


Fig.44　ＳＫ26実測図（1/40）

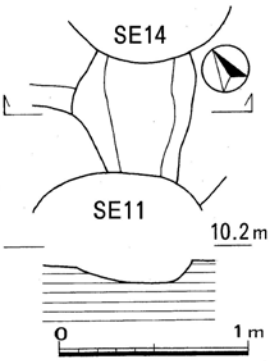


Fig.45　ＳＫ27実測図(1/40)

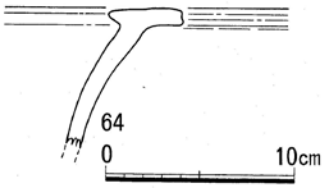


Fig.46　ＳＫ27実測図（1/4）

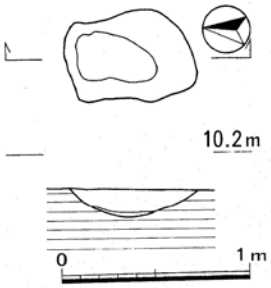
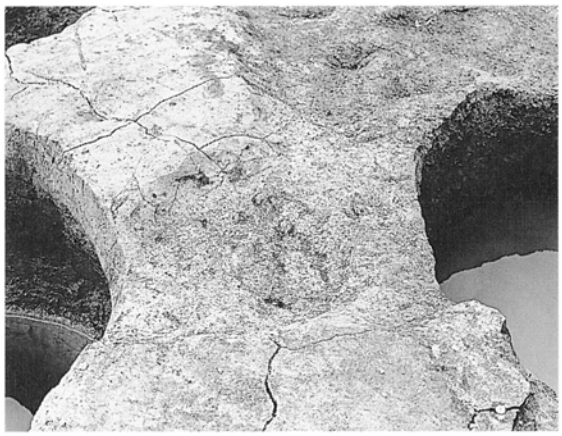


Fig.47　ＳＫ28実測図（1/40）

Ph.39　ＳＫ26（南から）



Ph.40　ＳＫ27（南から）

Ph.41　ＳＫ28（東から）

ＳＫ２９

Ｂ－４で検出した不定形土坑である。長軸0.9m、短軸0.7m、深さ0.2m。覆土は灰褐色土である。弥生土器が出土した。65は甕の口縁部で復元口径21.3cmを測る。

ＳＫ３０

Ｆ－14・15に位置する不定形土坑である。長軸1.6m、短軸1.0m、深さ0.2m。覆土は１：茶褐色土砂粒含む　２：暗褐色土　ロームブロック含む　３：黄褐色土である。

弥生土器の小破片が５点出土したのみである。

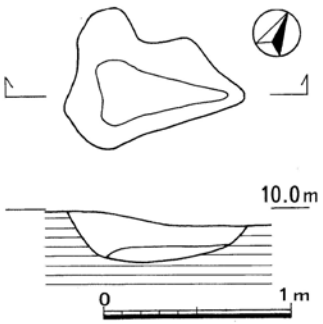


Fig.48　ＳＫ29実測図(1/40)

Ph.42　ＳＫ29（南から）

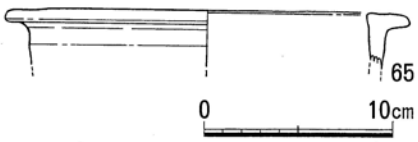


Fig.49　ＳＫ29出土遺物実測図(1/4)

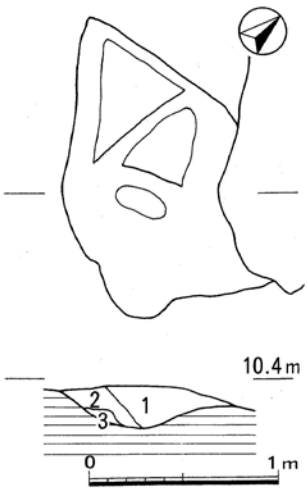


Fig.50　ＳＫ30実測図(1/40)

Ph.43　ＳＫ30（東から）

4．包含層の調査

前述したように調査区東側は台地が緩やかに傾斜しており、その上面には遺物包含層が形成されている。上層は暗茶褐色土層、下層は黒褐色土層である。２層に分層して掘り下げたが、発掘区北側や南東部では違いが明瞭でなかった。さらに一部のグリッドではさらに下部の砂混じりの灰色粘土から遺物が出土しており、最下層として取り上げた。遺物は２×２m四方のグリッドにより取り上げた。今回出土した遺物のほとんどはこの包含層からの出土である。グリッドごとの出土土器の重量と、出土石器、土製品、石製品、金属器の器種をTab.２にまとめた。

弥生時代から古代までの遺物が出土したが中心は弥生時代中期の土器である。すべて破片の状態で出土し、ほとんど接合しなかった。下層には須恵器や土師器をほとんど含まない。上層では須恵器片276点、瓦片５点、土師器は弥生土器との分離が困難であるが、明らかに弥生土器ではない甑の把手が８点ある。下層からは須恵器５点のみの出土である。下層の須恵器はＣ－３・４・８、Ｅ－13からの出土で、Ｃ－３・４については先に述べた発掘区の北側寄りの上層・下層が明瞭に分離できなかった部分、Ｃ－８についてはは試掘トレンチが入った部分で、上層の遺物が混入してしまったものと思われる。もしくは遺構を見逃してしまったかであろう。

また、銅矛の鋳型、銅鏃、鐸形土製品といった出土例が少ない遺物も出土した。

（１）土器

包含層の土器の出土状況をFig.51に示す。西側の台地に近い方は包含層が薄いので出土量は少ない。Ｄ列のグリッドで出土量が最大となり、台地から離れる東側では少なくなる。台地上よりの転落、廃棄により、台地際に多数の土器が集積したと考えられる。また、南側より北側の方が遺物の出土量が多い。

66～78は奈良時代の遺物である。66・67は須恵器の蓋である。復元口径はそれぞれ14.0cm、14.2cmである。67の天井部はヘラ切り未調整。68～72は須恵器の坏椀である。68の外底面にはにはヘラ記号がみられる。口径13.4cm、高台径8.7cm、器高5.1cm。69・70の高台径はそれぞれ10.3cm、8.0cm。73～75は須恵器の皿である。73は口径17.2cm、器高2.0cm。74は口径18.3cm、器高2.5cm。75には内外面に同一のヘラ記号があり、「寺」と読める。口径20.0cm、器高2.5cm。76は長頸壺である。頸部中央あたりに１条の沈線が巡る。頸部の付け根の径は7.0cm。77は須恵器の胴部下半である。壺か。78は平瓦である。凹面ヘラ削り、凸面格子目タタキ。

79～82は古墳時代の須恵器の坏身である。79にはヘラ記号がある。また、外面に胎土目が付着する。復元口径12.2cm、受部径14.5cm、器高3.5cm。80は復元口径14.2cm、受部径16.4cm。81は復元口径12.7cm、受部径14.7cm。83は須恵器の甕の口縁部である。

84～91は土師器の把手である。

92～134は弥生土器である。120を除いて中期中頃から後半に位置づけられる。

92～112は甕である。92～99は口縁部で、99以外は口縁部に平坦面をつくる。95～98には口縁下に断面三角形の突帯を付ける。復元口径は92が26.2cm、93が26.2cm、94が32.6cm、95が34.0cm、96が27.6cm、97が48.8cm、98が42.0cmである。99は口縁部が「く」字形に外反するが、屈曲は明瞭ではない。屈曲部に突帯を付ける。復元口径41.0cm。100～112は底部である。厚底で、上げ底のものから、やや薄い底で平底のものまである。底径は100が6.4cm、101が6.4cm、102が7.2cm、103が6.8cm、104が6.4cm、105が7.6cm、106が6.8cm、107が7.4cm、108が9.8cm、109が7.0cm、110が6.9cm、111

が7.7cm、112が8.0cmである。

113～129は壺である。113～116は広口壺である。113は小型で、頸部は直立気味。114～116は鋤形口縁であるが、115は外側には広がらない。復元口径は113が14.6cm、114が25.0cm、115が36.0cm、116が38.4cmである。117は無頸壺である。平坦な口縁で、その下に断面三角形の突帯を付ける。復元口径28.8cm。118・119は樽形壺である。内傾する素口縁で、その下に上向きに長めの突帯を巡らす。復元口径は118が35.6cm、119が38.8cmである。120は複合口縁壺である。後期初頭に位置づけられる。復元口径11.6cm。121は胴部で、最大径のやや下に断面三角形の突帯を貼り付ける。胴部最大径の復元値は27.0cm。122～129は底部である。底径は122が6.0cm、123が6.8cm、124が7.4cm、125が11.6cm、126が7.8cm、127が5.5cm、128が6.4cm、129が3.5cmである。

130は鉢である。口縁は平坦面をなし、その下に断面三角形の突帯を巡らす。復元口径29.4cm。131は高坏の軸部である。132は器台である。口径11.0cm。133は器種不明であるが、脚部である。底径5.2cm。134は手づくね成形のミニチュア土器である。底部に植物の圧痕が残る口径6.3cm、底径3.1cm、器高4.7cm。

（2）石器

石器は攪乱出土のものや、遺構に伴わないものを含めて81点出土している。内訳は石庖丁30点、石剣17点、砥石15点、石鏃6点、打製石斧3点、磨石・敲石類3点、磨製石斧2点、抉入片刃石斧、ミニチュア石斧、穿孔具各1点、器種不明石器2点である。

以上の他、旧石器時代の石器が出土しており、別項で説明する。出土分布をみると弥生時代の石器は弥生土器と同じ傾向の出土状況を示すが、旧石器時代の資料は調査区南側に多い。

135～140は打製石鏃である。135・138は古銅輝石安山岩製、他は黒曜石製である。139・140は縄文

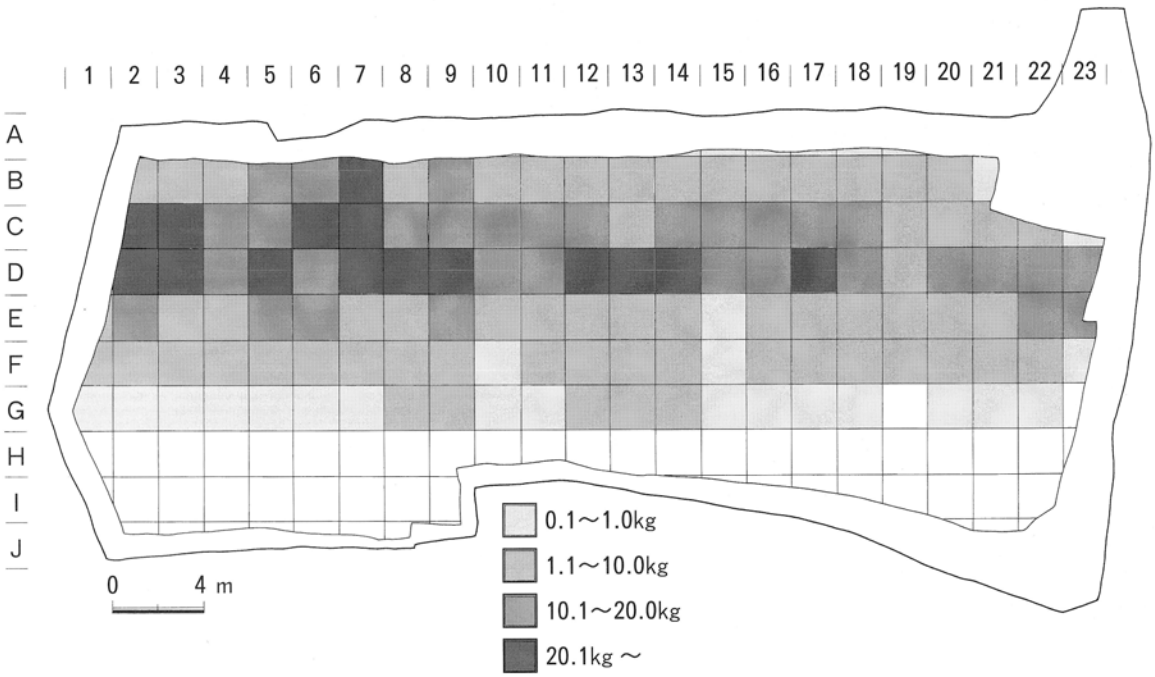


Fig.51　包含層出土土器の重量

Tab. 2　包含層出土遺物

グリッド	土器重量（kg）	石器・土製品・石製品・金属器
A － 2	0.1	
A － 3	0.1	
A － 4	0.5	
A － 5	0.3	
A － 8	0.8	
A － 9	0.3	
A － 10	0.3	
A － 11	0.3	
A － 12	0.5	
A － 13	0.6	
A － 14	1.0	
A － 15	0.5	
A － 16	0.3	
A － 17	0.3	
A － 18	0.3	
A － 19	0.1	
A － 20	0.1	
B － 2	8.0	石剣
B － 3	7.8	石庖丁
B － 4	5.3	石鏃、投弾
B － 5	11.6	
B － 6	17.1	石鏃、石包丁３、打製石斧
B － 7	32.6	
B － 8	7.2	
B － 9	11.4	
B － 10	3.0	石庖丁、砥石
B － 11	5.9	
B － 12	8.2	石庖丁
B － 13	8.0	石庖丁、銅矛鋳型
B － 14	4.4	太型蛤刃石斧
B － 15	3.0	投弾
B － 16	2.6	旧石器微細剥離ある剥片
B － 17	6.0	石剣
B － 18	2.9	ナイフ形石器
B － 19	1.3	
B － 20	2.1	
B － 21	0.5	
C － 2	27.4	石庖丁４、砥石
C － 3	22.2	石庖丁２、砥石
C － 4	14.8	投弾
C － 5	19.4	石庖丁、投弾２
C － 6	29.7	石庖丁、石剣
C － 7	45.8	石庖丁
C － 8	11.8	
C － 9	18.6	砥石
C － 10	11.6	砥石
C － 11	11.2	器種不明石器
C － 12	13.4	石剣、銅鏃
C － 13	6.4	
C － 14	14.6	石庖丁
C － 15	13.3	石庖丁２
C － 16	10.8	柱状片刃石斧、磨石２
C － 17	17.2	石庖丁、石剣、砥石
C － 18	10.6	
C － 19	3.0	旧石器剥片２
C － 20	6.0	石庖丁
C － 21	2.3	
C － 22	2.0	
C － 23	0.6	
D － 2	28.2	石庖丁
D － 3	43.4	砥石
D － 4	19.8	石庖丁、砥石３
D － 5	20.4	砥石
D － 6	17.0	
D － 7	39.0	石庖丁、砥石、鐸形土製品、投弾
D － 8	21.0	石庖丁、石剣、投弾
D － 9	32.0	
D － 10	13.0	
D － 11	17.0	打製石斧、石庖丁、石剣３、磨石
D － 12	23.4	石剣２
D － 13	20.4	打製石斧、ミニチュア石斧
D － 14	23.4	石剣
D － 15	18.0	砥石
D － 16	19.4	
D － 17	23.8	投弾
D － 18	13.8	
D － 19	9.4	
D － 20	11.6	石鏃、石剣２
D － 21	10.8	
D － 22	13.4	
D － 23	12.1	
E － 1	2.0	
E － 2	10.4	
E － 3	6.6	
E － 4	7.0	
E － 5	15.1	砥石
E － 6	11.6	石庖丁
E － 7	6.8	石庖丁
E － 8	8.2	穿孔具
E － 9	18.2	石庖丁
E － 10	4.2	
E － 11	5.6	
E － 12	4.9	石鏃、石剣、投弾
E － 13	6.8	
E － 14	9.3	
E － 15	1.0	
E － 16	10.0	
E － 17	4.1	
E － 18	1.1	旧石器剥片
E － 19	2.4	
E － 20	1.1	
E － 21	5.4	
E － 22	16.4	
E － 23	16.6	
F － 1	2.3	
F － 2	2.3	
F － 3	2.2	
F － 4	1.7	
F － 5	2.0	
F － 6	2.1	
F － 7	1.7	
F － 8	3.0	
F － 9	2.0	
F － 10	0.9	
F － 11	1.8	投弾
F － 12	1.8	石鏃
F － 13	2.0	
F － 14	3.7	
F － 15	0.4	彫器
F － 16	4.4	
F － 17	2.0	
F － 18	1.9	
F － 19	2.0	
F － 20	3.7	石剣
F － 21	5.8	
F － 22	8.4	
F － 23	0.4	
G － 1	0.7	
G － 2	0.3	
G － 3	0.4	
G － 4	0.1	
G － 5	0.2	
G － 6	0.2	
G － 7	0.8	
G － 8	2.0	
G － 9	1.7	
G － 10	0.5	
G － 11	0.4	
G － 12	1.5	
G － 13	1.7	
G － 14	1.6	
G － 15	0.9	旧石器微細剥離ある剥片
G － 16	0.2	
G － 17	0.1	
G － 18	0.1	
G － 20	0.1	旧石器微細剥離ある剥片
G － 21	0.1	
G － 22	0.1	
その他		石鏃、石庖丁、太型蛤刃石斧、石剣、砥石、器種不明石器

時代早・前期のものと思われる。135は大型の石鏃である。石材の質が悪く、斜めに層理が入っている。

141～150は石庖丁である。立岩産と言われている輝緑凝灰岩製のもの（141・142）もあるが、縞状に層が入る砂石を利用したもの（147～150）が多い。143～146は頁岩製。148～150は未製品である。

151・152は太型蛤刃石斧である。基部を欠損する。今山産玄武岩製。

153は打製石斧である。基部のみの残存である。頁岩製。

154は柱状片刃石斧である。石材は凝灰岩質のホルンフェルス。

155～162は石剣である。基部に抉りをもつもの、穿孔するものがある。研磨が粗く、未製品が多いか。縞状に層の入る砂岩を利用している。

163・164は磨石である。163は広範囲に敲打痕がみられる。164は凹石、敲石としても利用されている。

165～166は砥石である。砂岩製。

167は穿孔具である。先端部は欠損しているが、下面に突起を設け、溝をきって再加工している。硬質の砂岩製である。

砂岩製の石庖丁、石剣の出土が多く、未製品も存在する。また、砥石、穿孔具の出土から近辺で石器製作を行っていたと考えられる。

（3）土製品・石製品

168は鐸形土製品である。歳頭四角錐形で、下部を欠損する。鈕の表現はない。外面は丹塗りされている。舞に1ヶ所、側面に3ヶ所型持孔を模したと考えられる穿孔がある。側面のもう1面は欠損により穿孔の有無は不明であるが、穿孔されていたと思われる。また、二側面の上部に胎土を貼り付けふくらみをつくっている。

169～177は投弾である。紡錘形に成形される。178も紡錘形ではないが投弾か。

179は中細型銅矛の鋳型片である。石英長石斑岩製である。アミ部は被熱で黒く変色している。実測図の左側の側面はほぼ原面が残る。また、下の面は剥落しているがほぼ原面に近いところである。現存厚8.1cm。

このほかにも石英長石斑岩の破片が十数点出土しており、青銅器製作を伺わせる。

（4）青銅器

180は銅鏃である。有茎鏃で、長く鋭いかえりをもつ。先端部を若干欠く。残存長4.6cm、幅1.8cm、重量5.36gを測る。茎部は断面楕円形で、付け根近くに段をつくり、先端は細く尖っている。6次調査で出土した鋳型のタイプによく似ているが、少々小さめである。

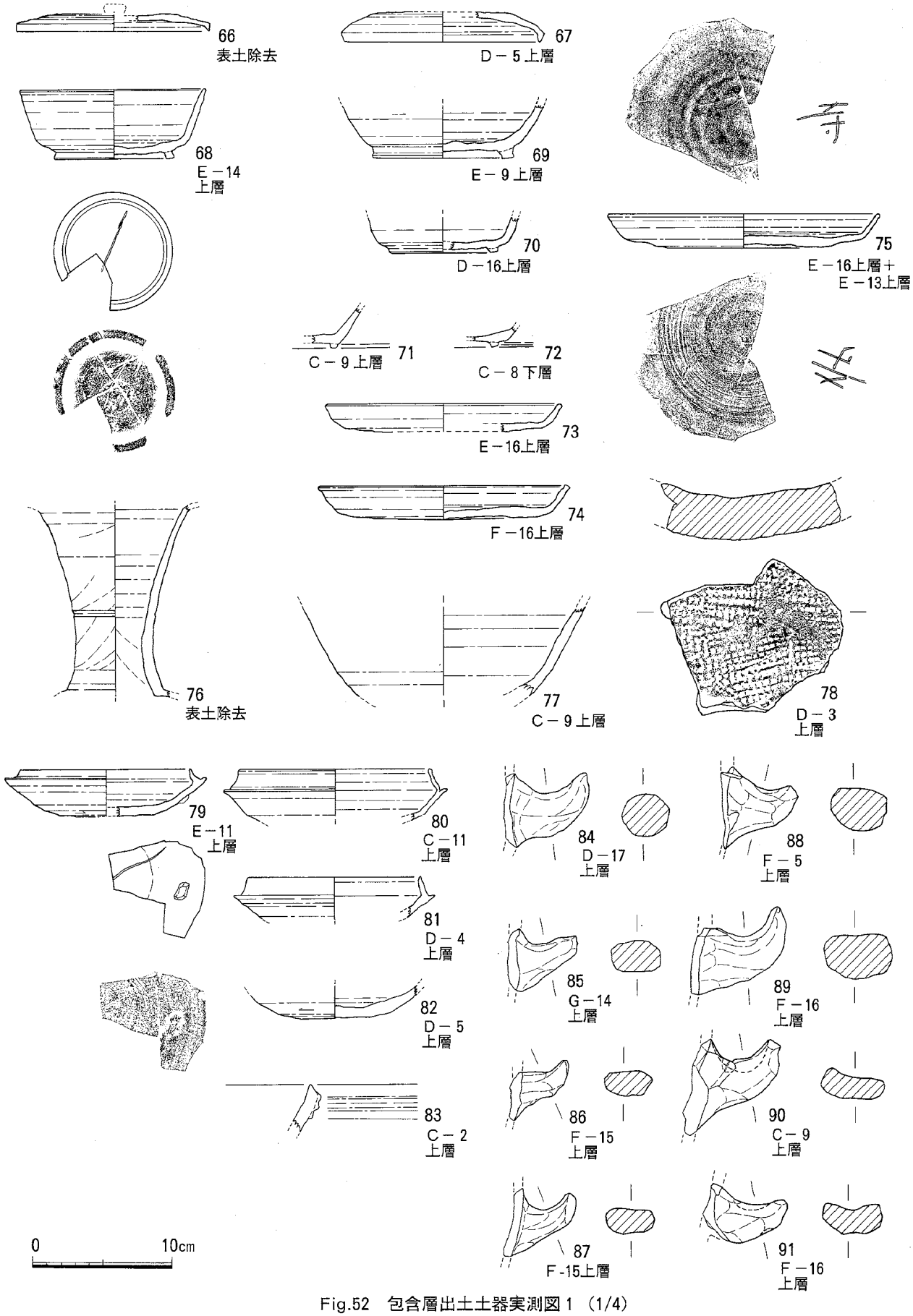


Fig.52　包含層出土土器実測図１（1/4）

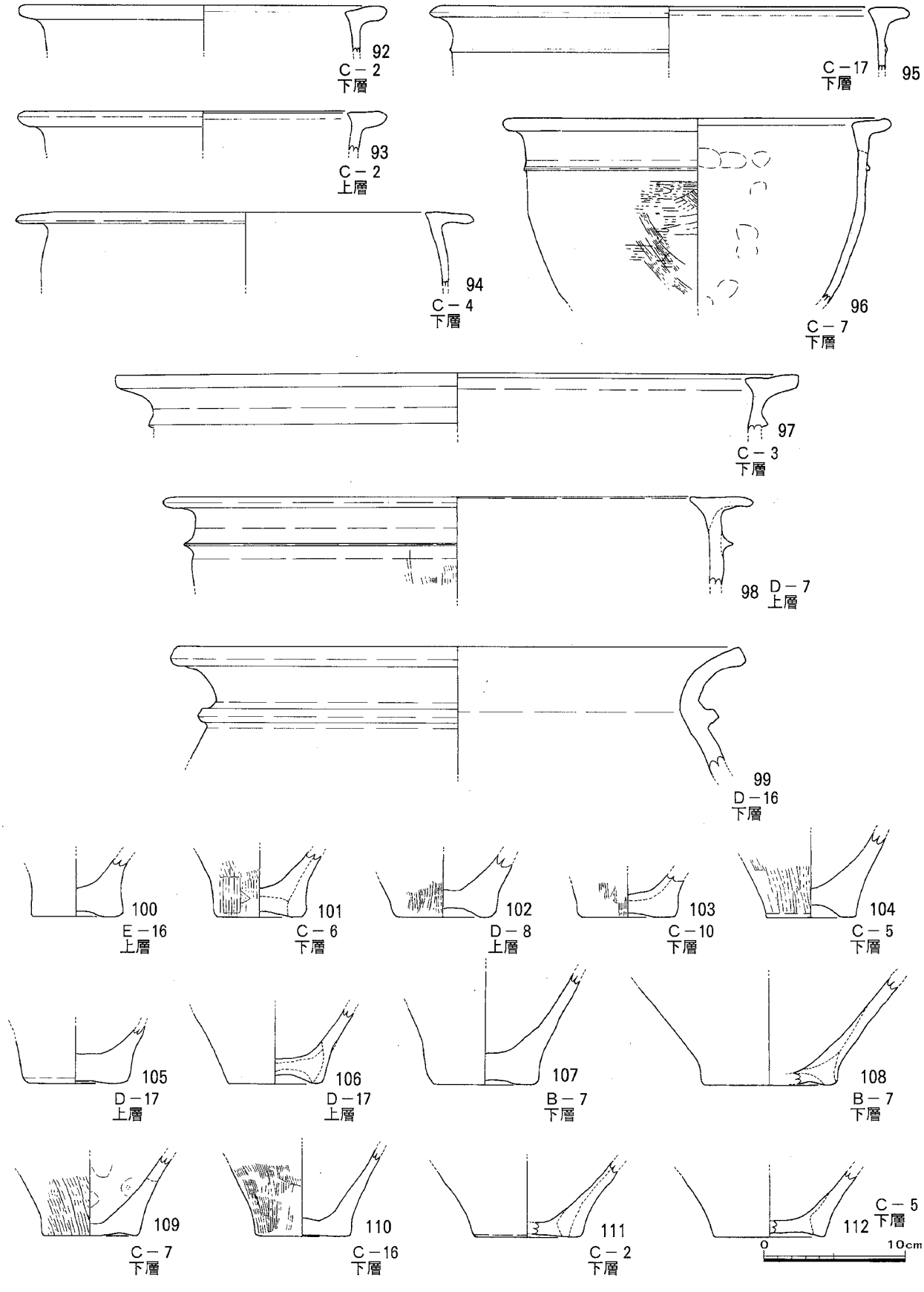


Fig.53　包含層出土土器実測図２（1/4）

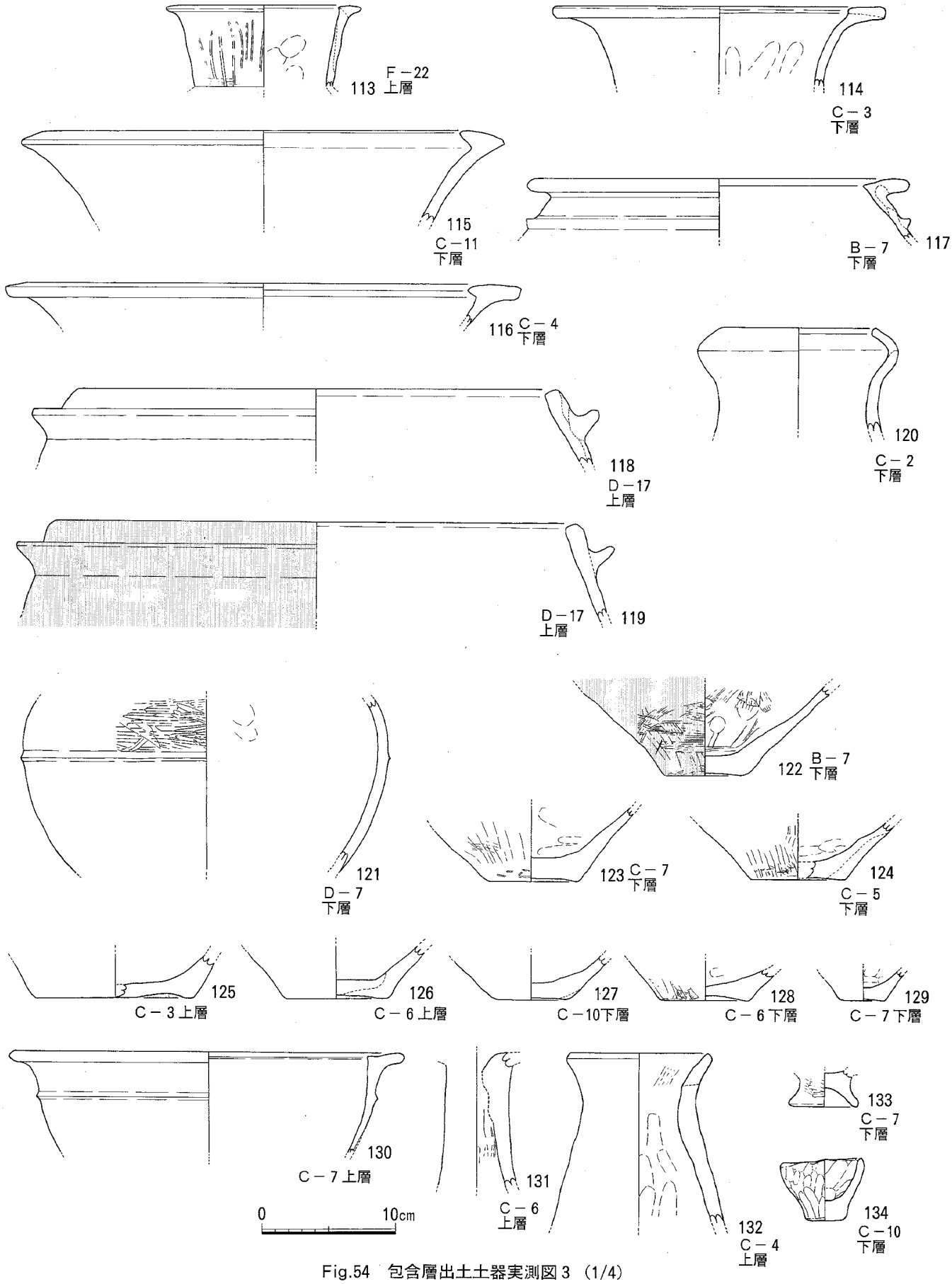
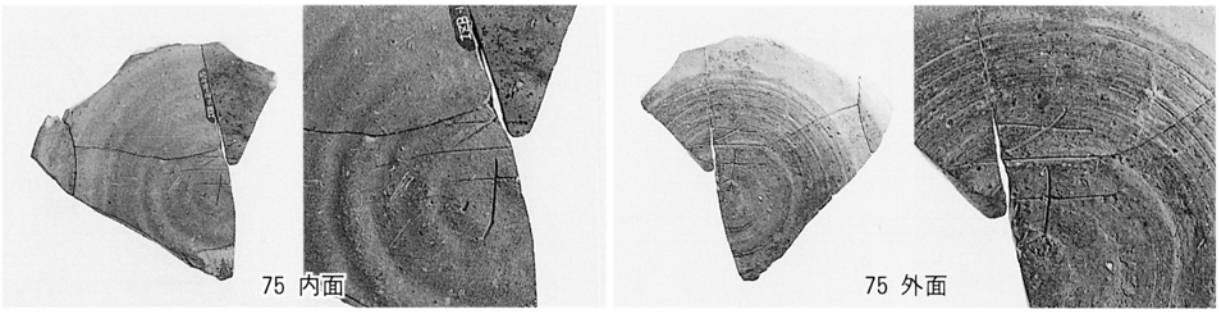


Fig.54 包含層出土土器実測図3 (1/4)



Ph.44　包含層出土土器（約1/4・約1/2）

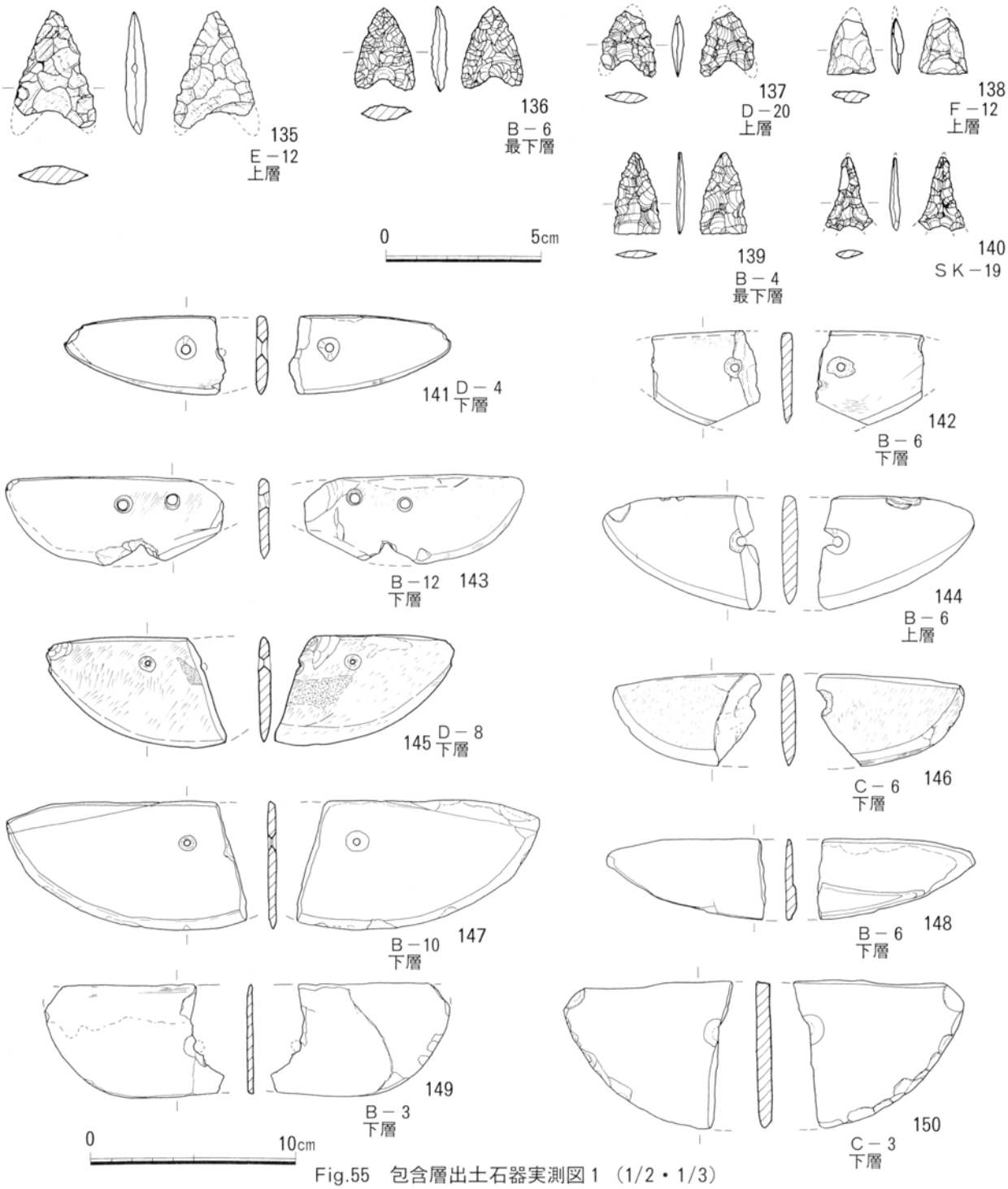


Fig.55　包含層出土石器実測図１（1/2・1/3）

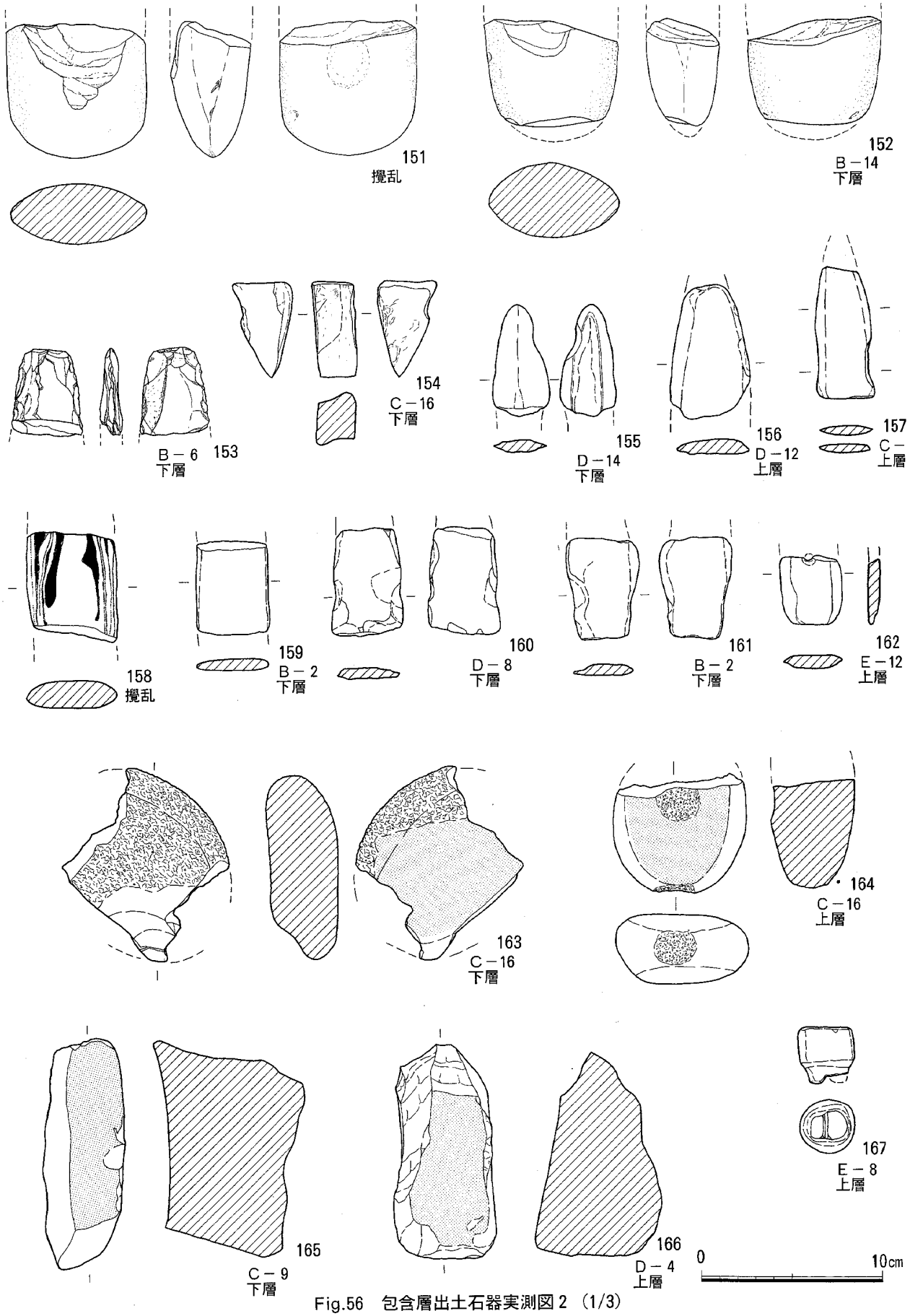


Fig.56　包含層出土石器実測図２（1/3）

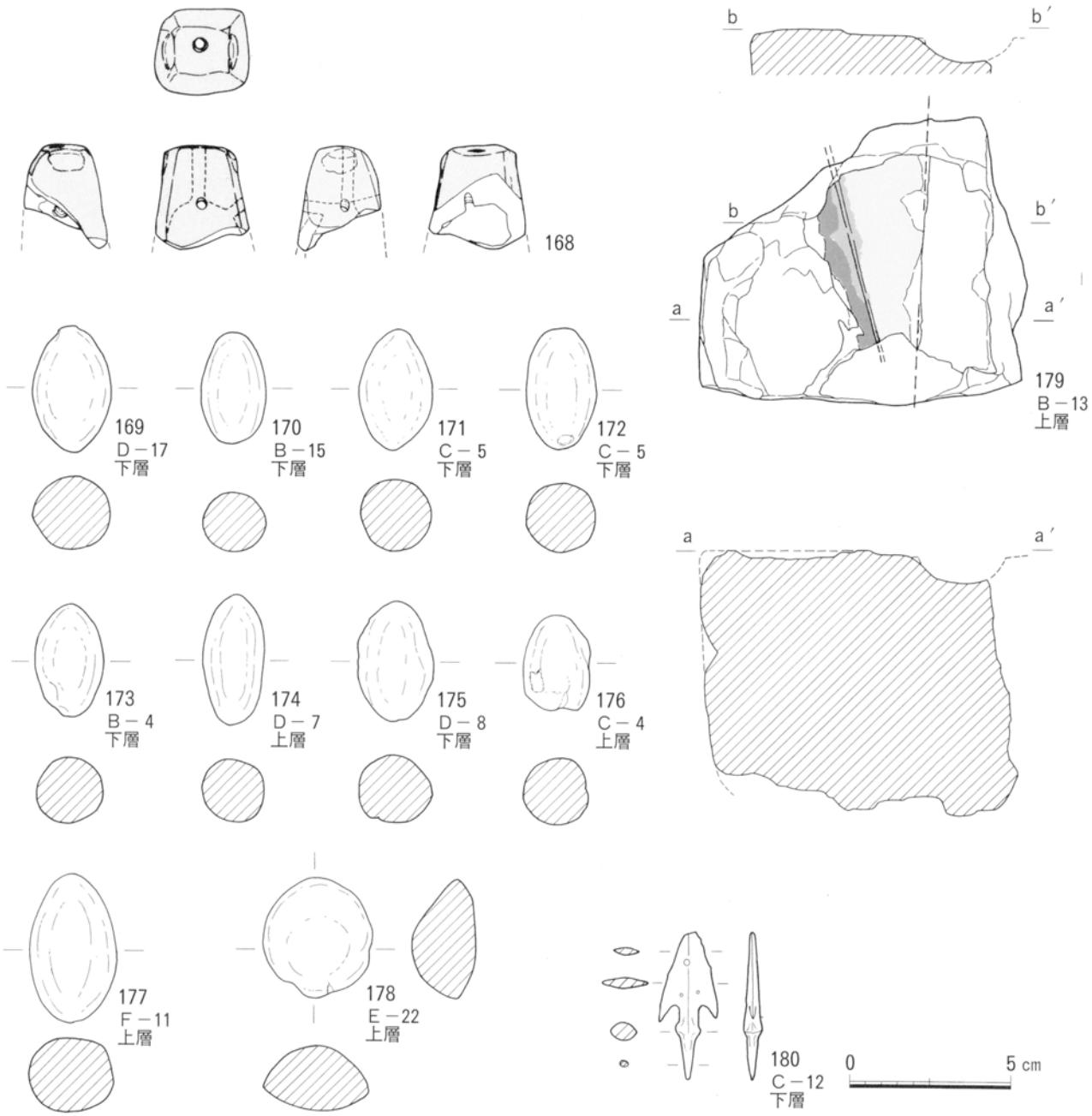
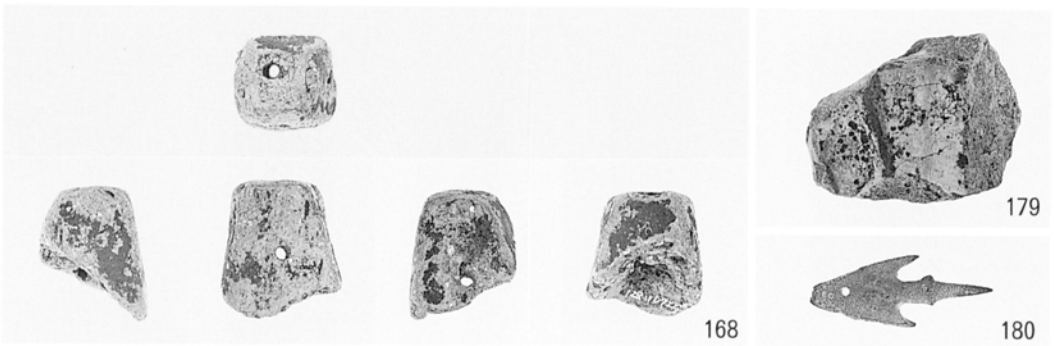


Fig.57　包含層出土土製品・石製品・金属器実測図（1/2）



Ph.45　包含層出土土製品・石製品・金属器（179：約1/4・他：約1/2）

（５）旧石器

本調査区では11点の旧石器時代に所属する遺物が出土した。遺物はほとんどが後世の包含層や遺構内からの出土であり、現位置を保つものではない。出土位置は包含層15グリット以南の径15mの範囲内に８点が出土し、他にＳＤ０１とＳＫ１９埋土中にそれぞれ１点が出土した。全体として石器の表面に調査時以外の二次的な破損が少なく、出土位置が限られていることからみて、本来の埋没位置から大きく離れていないと考えられる。隣接する調査区西側台地上に当該期の遺跡があったと推定される。石器類の内容はナイフ形石器１点、彫器１点、微細剥離のある剥片３点、剥片６点である。以下では二次的調整があるものを報告する。

181はナイフ形石器の先端部破片である。石材は弱透明黒色の黒曜石である。縦長剥片の打点側を先端とし、片側に入念なブランティングを施している。長さ2.0cm、幅1.1cm、厚さ0.4cmを測る。182は彫器である。石材は灰色の黒曜石である。淀姫産出の石材に類座する。縦長剥片の先端部に打面調整を施し、先端部左側の側辺に向けてファッシットを入れる。腹面側に使用痕と見られる僅かな線状痕がある。長さ4.6cm、幅1.6cm、厚さ0.9cmを測る。183は微細剥離のある剥片である。石材は漆黒色の黒曜石である。縦長剥片の両側辺に微細な剥離が見られる。長さ4.1cm、幅2.7cm、厚さ0.5cmを測る。184は微細剥離のある剥片である。石材は漆黒色の黒曜石である。調査時に二折したが、両端は古く折断している。縦長剥片の両側辺にやや内湾気味に微細な剥離がみられる。長さ4.8cm、幅2.8cm、厚さ0.9cmを測る。185は微細剥離のある剥片である。石材は半透明黒色の黒曜石である。縦長剥片の両側辺、先端部に微細な剥離が見られる。先端部は掻器としての利用も考えられる。長さ5.3cm、幅2.6cm、厚さ1.0cmを測る。これ以外の剥片は黒曜石５点と珪質岩１点である。

以上の資料は縦長剥片を基調とし、ナイフ形石器や北部九州の特徴的な彫器をもっている。周辺では那珂遺跡群第41次調査出土の石器組成に近い内容である。本地域の後期旧石器時代後半期でも新しい一時期の石器組成であると考えられる。

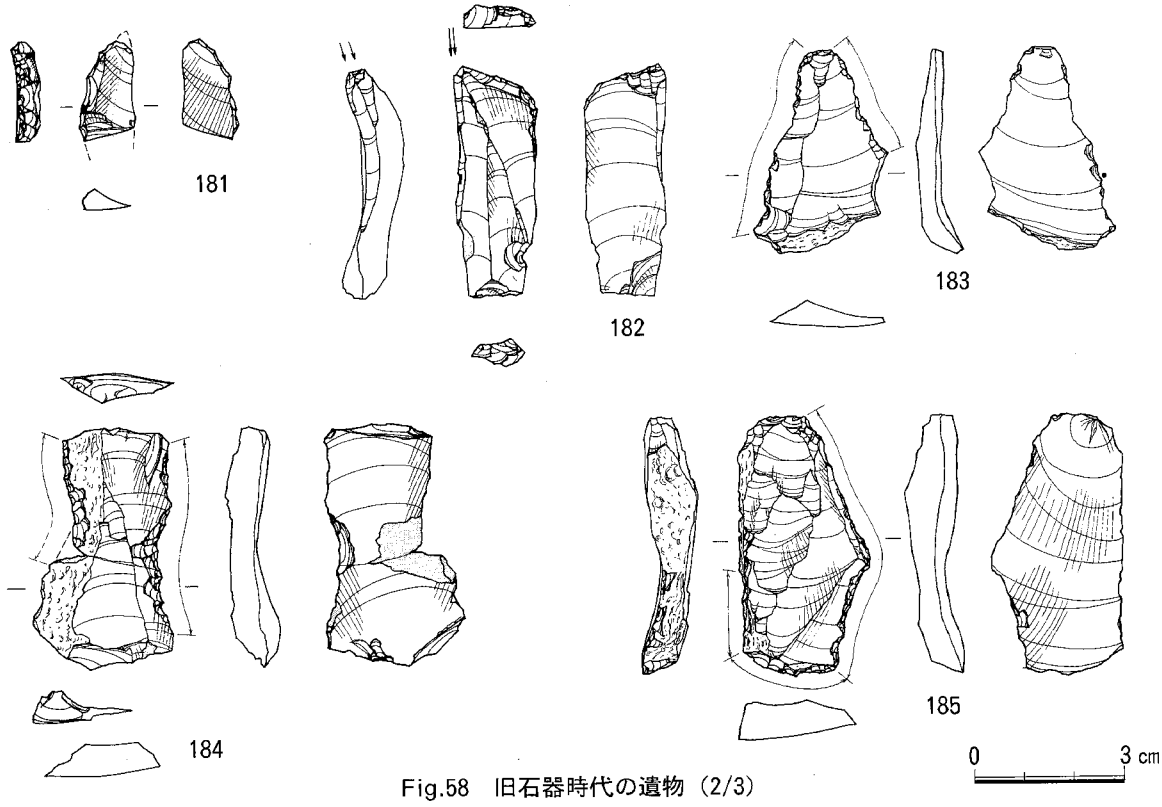


Fig.58　旧石器時代の遺物（2/3）

Ⅲ　ま　と　め

今回の調査は井尻Ｂ遺跡の縁辺を調査したといえる。遺構の分布もまばらで、しかも小さな窪み程度の遺構が多い。遺構からの出土遺物も少なかった。

しかし、今回の調査では、台地の落ち際に堆積した包含層中より多量の土器の出土があった。弥生時代中期中頃から後半といった頃の土器が破片の状態で出土している。これまで井尻Ｂ遺跡の弥生時代中期の状況は所々で井戸や土坑が見つかる程度であったが、今回の多量の土器の出土で、中期にもかなりの規模の集落が存在することが予想できることになった。10次調査地点で検出した大規模な溝を考えると、遺跡の北部に中期の大規模な区画溝を伴う集落が存在したのではないかとも考えられ、今後の調査に期待がかかる。

また、この包含層中より石器も出土しており、特に砂岩製の石庖丁の未製品や多くの石剣の出土は近辺で石器製作を行っていたことを伺わせる。

さらにこの包含層中より鋳型が出土している。中細型銅矛の鋳型と思われる。このほか、鋳型の石材となる石英長石斑岩の破片も出土している。これまで井尻Ｂ遺跡では６次調査で、銅鏡・銅鏃の鋳型の出土があり、江戸時代には銅矛の鋳型が出土した記録が残っている。井尻Ｂ遺跡内で青銅器の製作を行っていたのは確実であろう。井尻Ｂ遺跡の南方１kmの須玖・岡本遺跡群では九州の弥生時代における青銅器の鋳型の半数が出土している。井尻Ｂ遺跡での青銅器生産が、これらの一部に含まれるのか、それとも井尻Ｂ遺跡内で独立した生産体制を持っていたのか、今後の検討課題である。

また、福岡市内でははじめて確認された鐸形土製品の出土も特筆すべきことである。北部九州の鐸形土製品は佐賀県に分布の中心をもち、福岡平野ではこれまで春日市での２例しか知られていなかった。この存在が佐賀県地域との交流の証拠となるのかどうかはわからないが、何らかの意味を持つのは確かであり、鐸形土製品の使用方法とともに検討していかねばならない問題である。

弥生時代後期から古墳時代初頭にかけては井戸、土坑、掘立柱建物が検出された。これらの遺構からは遺存状態のよい土器が出土している。井尻Ｂ遺跡群ではこの時期が集落の最盛期で、台地際の本調査地点でも、竪穴住居は発見されなかったものの、集落域に取り込まれていたことになり、台地いっぱいに集落が拡大していた可能性がある。かなりの大規模な拠点集落であったのであろう。

井尻Ｂ遺跡は那珂・比恵遺跡と須玖遺跡群の間に位置し、両集落を行き来する場合には必ず通過したであろう。那珂・比恵遺跡を縦貫する道路の存在が指摘されているが、もしこれが須玖遺跡群まで伸びているとすると、井尻Ｂ遺跡でも存在することになる。今後の調査で明らかになることに期待したい。

奈良時代の遺物に関しては「寺」のヘラ書きがある須恵器が注目される。３次調査地点では溝中から多量の瓦が出土し、寺院の存在が推定されている。この「井尻廃寺」推定地から11次調査地点は200m程の距離である。今回、瓦もわずかながら出土しており、「井尻廃寺」関連の遺物が散布しているのは間違いない。このヘラ書きの「寺」が直ちに「井尻廃寺」を指すと断定することは難しいが、寺院の存在を示す具体的な証拠の１つとして重要な発見となろう。

井尻Ｂ遺跡はまだ調査数が少なく、調査面積もわずかである。しかし、現在、井尻Ｂ遺跡が立地する台地を横断する新設道路の建設が進められており、今後周辺の開発が激しくなると予想される。それに伴う事前の埋蔵文化財調査により井尻Ｂ遺跡における弥生時代集落や古代寺院の様相が次第に明らかにされていくことであろう。

井尻B遺跡 7

－井尻B遺跡群第11次調査の報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第644集

2000年3月31日

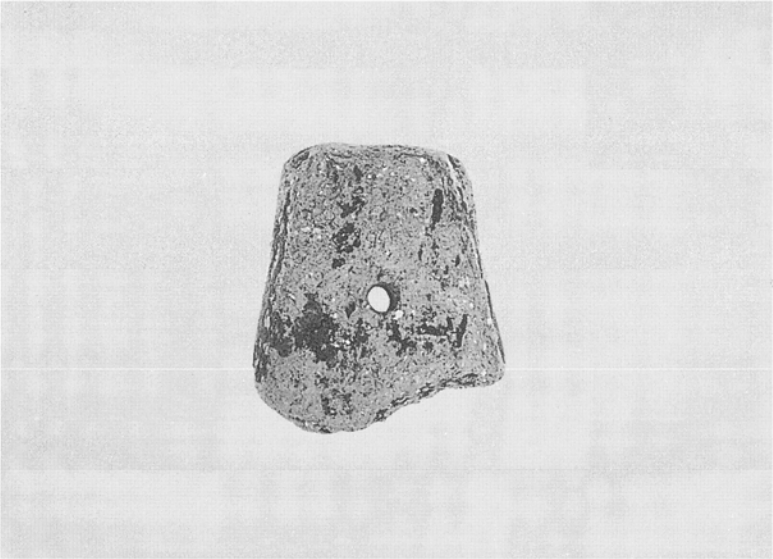
発　　行：福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8-1
☎092－711－4667

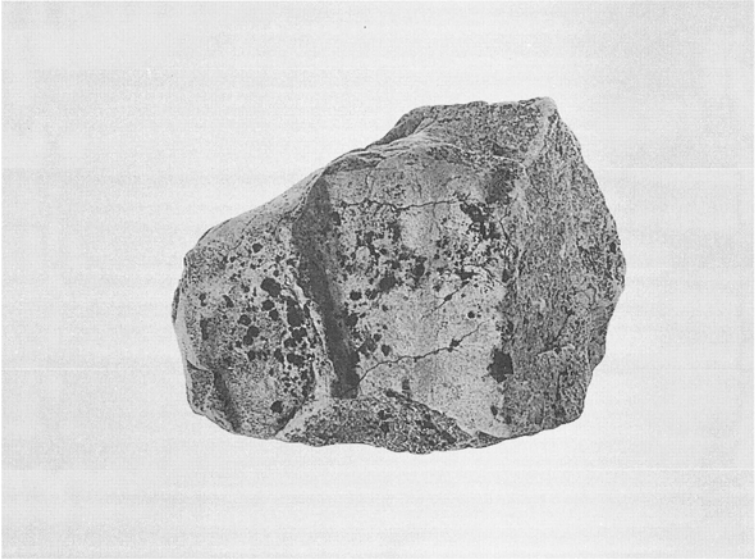
印　　刷　松古堂印刷株式会社
福岡市西区周船寺1丁目7-64
☎092－806－1661

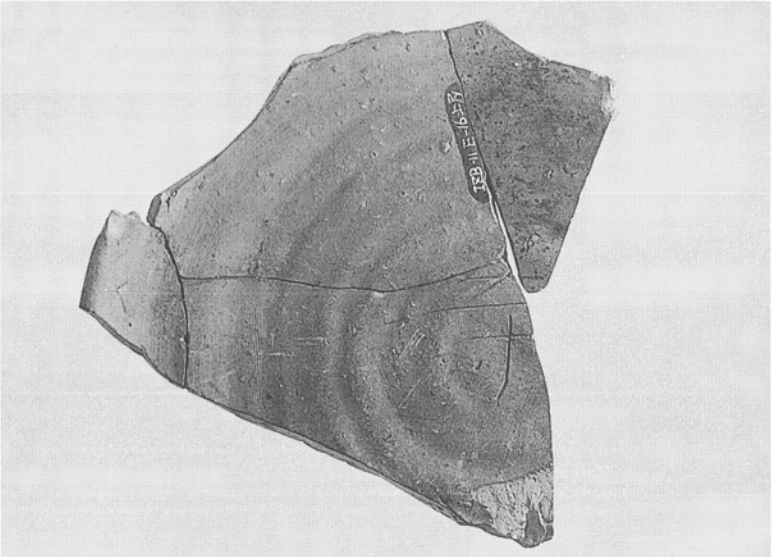
IJIRI B SITE 7

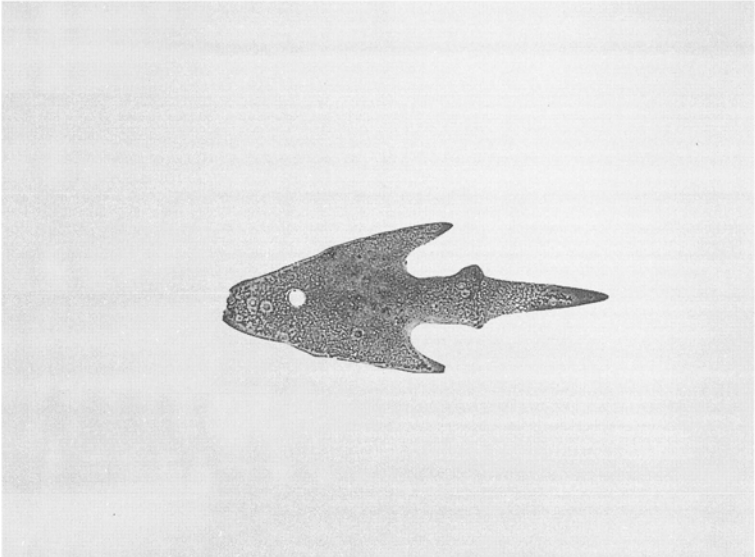
— Results of the 11th excavation of the Ijiri B sites —

Report of Archaeologicai Investigations of Fukuoka city, Vol.644









2000

THE BOARDS OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY